

## 津阪東陽 『杜律詳解』 訳注稿(5)

著者	二宮 俊博
雑誌名	椋山女学園大学文化情報学部紀要
巻	4
ページ	125-157
発行年	2004
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1454/00002390/">http://id.nii.ac.jp/1454/00002390/</a>

# 津阪東陽『杜律詳解』 訳注稿 (五)

二宮俊博

本稿には、津阪東陽『杜律詳解』巻上の「至日遣興奉寄北省旧閣老兩院故人二首」其一から「江村」詩までを収める。原文の「メ」は「シテ」に、「ト」は「コト」に、「斥」は「トモ」に、「寸」は「トキ」にそれぞれ改めた。明らかに訓点脱落していると思われる箇所には、これを補った。また詩句の左傍にとどころ附されている和訓は、※をつけて改行して示した。書き下し文は、紙幅の都合で省略する。なお、詩題の上には便宜的に通し番号を施した。

\*本稿は、平成十六年度嵯山女学園大学学園研究費(C)の研究報告の一部である。

- 022 至日遣興奉寄北省旧閣老兩院故人二首(其一)  
 023 至日遣興奉寄北省旧閣老兩院故人二首(其二)  
 024 恨別  
 025 卜居  
 026 堂成  
 027 寶至  
 028 蜀相  
 029 狂夫  
 030 江村

## 022 至日遣興奉寄北省旧閣老兩院故人二首(其一)

至日ハ即冬至。是ノ日、日行コト南ニ至テ而極ル、故ニ謂ニ之ニ至ト。遣ハ猶解也。遣興ヲ猶云レ述ト懐ノ興ハ起也。公感ニ至日ニ而悲興、故詠シテ以自解慰ス也。北省ハ謂ニ中書門下ノ兩省ヲ。杜氏通典ニ唐人謂テ尙書省ヲ爲ニ南省ト、中書門下ヲ爲ニ北省ト。李肇カ國史補ニ宰相呼テ爲ニ堂老ト、兩省相呼テ爲ニ閣老ト。蓋中書門下兩省ノ官人互ニ以ニ閣老ヲ相呼也。武后ノ時改ニ門下省ヲ爲ニ鸞臺、中書省ヲ爲ニ鳳閣、故ニ以ニ閣ヲ稱ス之ヲ也。舊閣老ハ指ニ嚴武賈至ノ輩ヲ。時ニ武ハ爲ニ給事中、屬ニ門下省ニ。至ハ爲ニ起居舍人、屬ニ中書省ニ。公有ニ留ニ別ニ賈嚴ニ閣老兩院ノ遺補ニ詩ト。又有ニ寄ニ賈嚴兩閣老ニ五十韻ト。公往ニ在ニ掖省ニ相呼稱ニ閣老ト。今ハ則爲ニ舊事ト。故ニ以ニ舊ヲ稱ス之ヲ。兩院ハ謂ニ拾遺補闕ヲ、説見ニ于前ト。即公同僚ノ故人。蓋指ニ岑參輩ト也。冬至ノ朝賀ハ天子御ニ含元殿ニ、盛禮亞ニ元旦ニ。公在ニ華州ニ、追ニ憶シ去歲ノ朝儀ヲ、不レ勝ニ感慨ニ、因テ賦シテ以寄レ懷ヲ也。

(注一) 『唐詩實珠』(卷五十一、冬至附臘日除夕)に「孝経緯に曰く、至に三義有り。一は陰極の至り。二は陽氣始めて生ず。三は日行南に至る」と注する。これは、『太平御覽』卷二十八、時序部十三、冬至の条に挙げる「孝経説」に見えるもの。また宇都宮遼庵の両著には南宋・祝穆『事文類聚』

前集卷十二に、天時部、冬至の条に「斗、子を指すを冬至と為す。至に三義有り。一は陰極の至り。二は陽氣始めて至る。三は日行南に至る、故に之を至と謂ふ」とあるのを挙げるが、これも、基づくのは『孝経説』である。

(注2) 何か基づくところあるのか、不明。

(注3) 例えば、『字彙』に「興は、虚陵の切。音馨。作なり、起なり」云々と。

(注4) 中唐・杜佑(七三三〜八一二)の『通典』卷二十一、中書省の条に「時に尚書省を謂ひて南省と為し、門下中書を北省と為す。亦た門下省を謂ひて左省と為し、中書省を右省と為す」と。輯註(卷五)に挙げ、宇都宮逸庵の兩著にも輯註を引く。

(注5) 晩唐・李肇『国史補』卷下に「宰相は相呼びて元老と為し、或いは堂老と為す。兩省は相呼びて閣老と為し、尚書丞郎郎中は相呼びて曹長と為す」と。『唐詩貫珠』に挙げる。

(注6) 『旧唐書』卷四十三、職官志、門下省の条に「龍朔(六六一〜六六四)改めて東台と為し、光宅(六八四)改めて鸞臺と為す。神龍(七〇五〜七〇六)復すと」と。

(注7) 『旧唐書』職官志、中書省の条に「龍朔改めて西台と為し、光宅改めて鳳閣と為す。神龍復た中書省と為す。開元元年(七一三)改めて紫微省と為し、五年旧に復すと」と。

(注8) 給事中は、正五品上。門下省に属し、制勅駁正の大事を掌る。『新唐書』卷二九、嚴武伝に「至徳の初め、肅宗の行在に赴き、房琯、其の名臣の子たるを以て、薦めて給事中と為す。已に長安を収め、京兆少尹に拜せらる」とあり、至徳元載(七五六)から至徳三載(七五八)三月に京兆少尹となるまで、その任にあった。給事中の嚴武に対しては「嚴八閣老に贈り奉る」詩(詳註卷五)がある。

(注9) 起居舎人は、従六品上。中書省に属し、天子の言葉を記録することを掌る。但し、ここに起居舎人というのは、中書舎人の誤り。訳注稿(三)、008「賈至舎人早に大明宮に朝するに奉和す」詩の(注1)参照。

(注10) 詳註卷五。

(注11) 乾元二年(七五九)作の「岳州の賈司馬六丈、巴州の嚴八使君兩閣老に寄す五十韻」詩(詳註卷八)。

(注12) 訳注稿(三)、011「省中の院壁に題す」詩の詳解に「門下省中の諫院の壁に

題するなり。拾遺補闕の兩職、供奉諷諫を掌る。(中略)故に其の直署を諫院と曰ふ」と。

(注13) 訳注稿(三)、008「賈至舎人早に大明宮に朝するに奉和す」詩の詳解に「丹鳳門内の第一の正殿を含元殿と曰ふ。之を大朝と謂ふ。(中略)元旦冬至の大朝会には之に御す」と。

〈至日〉は、冬至にはかならない。この日、太陽が最も南に行く、それゆえ〈至〉というのだ。〈遣〉は、解とほぼ同じ。〈興を遣る〉は、懷を述ぶというのとほぼ同じ。〈興〉は、起である。公は〈至日〉に心感じて悲しみが〈興〉つた。されば詠じて自ら解きほぐすのである。〈北省〉は、中書・門下の兩省のこと。杜氏『通典』に「唐人は尚書省を南省とし、中書省を北省とした」、李肇の『国史補』に「宰相は堂老と呼び、兩省では閣老と呼び合った」とある。ただし中書・門下兩省の官人は互いに〈閣老〉と呼び合ったのであろう。武后の時、門下省を鸞台と改称し、中書省を鳳閣とした。それゆえ〈閣〉字でこれを称する。〈旧閣老〉は、嚴武や賈至の輩を指す。当時、嚴武は給事中として門下省に属し、賈至は起居舎人として中書省に属していた。公に「賈嚴二閣老、兩院の遺補に留別す」詩、また「賈嚴兩閣老に寄す五十韻」詩がある。公は先に掖省にありしとき、〈閣老〉と呼んでいたが、今は昔のことになってしまった。それゆえ〈旧〉字でこれを称している。〈兩院〉は、拾遺・補闕のこと。説は前に見える。即ち公の同僚の友人で、けだし岑参の輩を指すのであろう。冬至の朝賀では、天子は含元殿に出御なさる。典礼の盛大さは、元旦につぐ。公は華州で去年の朝儀を追憶し、感慨にたえず、それで賦して懷いを寄せたのである。

去歲茲辰捧玉牀<sup>(注14)</sup> 五更三點入鵝行<sup>(注15)</sup>

※玉牀：タカミクラ 鵝行：レツ

辰、日也。玉牀、謂御牀。拾遺、掌供奉。則大朝會、御牀、蓋其所設也。更、歴也。經也。故五分<sup>(注16)</sup>夜時<sup>(注17)</sup>謂之<sup>(注18)</sup>更。漏刻每<sup>(注19)</sup>更

分五點<sup>ヲ</sup>。點<sup>ハ</sup>者以下<sup>ニ</sup>漏<sup>ラ</sup>滴水<sup>ヲ</sup>爲<sup>レ</sup>名<sup>ニ</sup>。五更三點、寅刻<sup>ノ</sup>六分也。鵷<sup>ハ</sup>驚<sup>レ</sup>屬<sup>ト</sup>。其飛<sup>コト</sup>有<sup>二</sup>次序<sup>一</sup>、小不<sup>レ</sup>踰<sup>レ</sup>大<sup>ヲ</sup>。故<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>喻<sup>ニ</sup>朝班<sup>ニ</sup>、謂<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>鵷<sup>ト</sup>。入<sup>レ</sup>鵷<sup>行</sup>言<sup>ハ</sup>隨<sup>テ</sup>舊閣<sup>ノ</sup>老故人<sup>ニ</sup>、得<sup>レ</sup>班<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>同列<sup>ニ</sup>也。

(注14) 〈玉〉字、錢注(卷十)及び輯註(卷五)は、〈御〉に作る。

(注15) 訳注稿(三)、008「賈舍人早に大明宮に朝するに奉和す」詩、(注12)に挙げた「顔氏家訓」卷六、書證第十七の記述の後に「更は、歴なり、経なり。故に五更と曰ふ爾」と。

(注16) 南宋・程大昌(一一二三〜一一九五)の「演繁露」卷四、更点の条に「点とは則ち漏を下る滴水を以て名と爲し、一更毎に又た分けて五点と爲すなり」と。

(注17) 初唐・李嶠(六四五〜七一四)の「長寧公主の東莊にて宴に侍す」詩に「長筵鵷鷺集まり、仙管鳳凰調ふ」の句があり、『唐詩集註』(卷三)は、『禽經』の注に「鷺は白鷺なり。小は大を踰えず。飛ぶに次序有り。百官縉紳の象なり」とあるのを挙げる。

(注18) 邵博「集解」に「言ふところは去年至日、朝に侍して同列に班することを得たり」と。

〈辰〉は、日である。〈玉牀〉は、御牀のこと。拾遺は、供奉を掌るとすれば、大朝会の御牀は、けだし設えたものであろう。〈更〉は、歴、経の意である。されば夜を五等分して〈更〉という。漏刻は、

〈更〉ごとに五点にわけける。〈点〉は、漏を下る水の滴りから名づけた。〈五更三点〉は、寅の刻六分である。〈鵷〉は、鷺の類。飛ぶのに序列があり、小さなやつが大きなものを追い越さない。それで朝廷の班列に喩え、これを「鵷鷺行」という。〈鵷行に入る〉は、〈旧閣老〉の〈故人〉に随つて、同列に並ぶことができたのを言う。

欲<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>趨走<sup>傷心</sup>ノ地<sup>ヲ</sup> 正<sup>ニ</sup>想<sup>ハ</sup>氤氳<sup>滿眼</sup>ノ香

※趨走:トチクサスル 傷心:アハレカナシキ 氤氳:ハルメキタル  
満眼:ニギノシキ

趨走<sup>ハ</sup>言<sup>ハ</sup>下<sup>ニ</sup>身<sup>ヲ</sup>爲<sup>レ</sup>掾吏<sup>ト</sup>、趨<sup>ニ</sup>謁<sup>ヲ</sup>郡將<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>折腰<sup>ノ</sup>勞<sup>也</sup>也。地<sup>ハ</sup>者猶<sup>レ</sup>處<sup>ニ</sup>。一本作<sup>レ</sup>處<sup>ニ</sup>。氤氳<sup>ハ</sup>香煙飄揚<sup>ノ</sup>之貌<sup>也</sup>。香<sup>ハ</sup>謂<sup>フ</sup>御爐<sup>ノ</sup>之香<sup>也</sup>。

公爲<sup>レ</sup>拾遺<sup>一</sup>、班近<sup>シ</sup>香案<sup>ニ</sup>、説見<sup>ヲ</sup>于<sup>テ</sup>前<sup>ニ</sup>。滿眼<sup>ハ</sup>雙夾<sup>、</sup>言<sup>ハ</sup>昔日咫尺<sup>ノ</sup>滿<sup>レ</sup>眼<sup>ニ</sup>、又言<sup>ハ</sup>懷想<sup>依依</sup>、如<sup>ク</sup>在<sup>ニ</sup>眼前<sup>ニ</sup>。正想<sup>ハ</sup>蒙<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>。四字紫<sup>ク</sup>相呼應<sup>ス</sup>。與<sup>ニ</sup>蓋將<sup>ヲ</sup>笑<sup>ニ</sup>同一<sup>ノ</sup>對法<sup>也</sup>。蓋兩省<sup>ノ</sup>舊侶<sup>、</sup>若憐<sup>ニ</sup>謫<sup>ノ</sup>宦<sup>ノ</sup>之況<sup>ヲ</sup>、欲<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>傷心<sup>何如</sup>、郡廳趨走<sup>ノ</sup>之際<sup>、</sup>正爾<sup>ノ</sup>想<sup>ハ</sup>像<sup>ニ</sup>朝儀<sup>ヲ</sup>、猶宛在<sup>ニ</sup>眼前<sup>一</sup>、尤難<sup>ク</sup>爲<sup>レ</sup>懷<sup>也</sup>。嗚呼、去年何等<sup>ノ</sup>清華<sup>、</sup>今<sup>ハ</sup>則<sup>レ</sup>何等<sup>ノ</sup>卑陋<sup>ノ</sup>。所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>觸感<sup>シ</sup>傷心<sup>也</sup>。

(注19) 薛益「分類」(卷二、時序)に「趨走心を傷ましむる地とは、華州の掾と爲つて、趨走して郡將に参謁するを言ふ」と。〈郡將〉は、州の長官のこと。「分類」は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。但し、顧宸「註解」や張遠「會粹」(卷六)は左拾遺として宮中に趨走したことをかく言うところ。(注31) 参照。

(注20) 訳注稿(四)、019「早秋熱を苦しむ、堆案相仍る」詩の(注9) 参照。

(注21) 例えば、『草堂詩箋』(卷十三)は「地」を「處」に作る。

(注22) 訳注稿(三)、009「宣政殿退朝、晩に左掖を出づ」詩の詳解。

(注23) 「文選」卷四十一に漢・李陵の作として載せる「蘇武に答ふる書」に、「風を望み想いを懐いて、能く依依たらざらんや」と。

(注24) 顧宸「註解」に「正に想ふは、知らんと欲せば」を蒙り来る」と。宇都宮遷庵の両著に挙げる。なお、鈴木虎雄「杜少陵詩集」(卷六)は、この一聯を「知らむことを欲す傷心の地に趨走し、正に氤氳たる滿眼の香を想ふことを」と訓じている。

(注25) 訳注稿(四)、021「九日崔氏藍田莊」詩の第三、四句「羞將短髮還吹帽、笑倩傍人為正冠」(短髮を將つて還つて帽を吹かれんを羞ぢて、笑つて傍人を倩うて爲に冠を正さしむ)を指す。

(注26) 「唐詩貫珠」に「所以に感觸す、上年は何等の清華ぞ、今は則ち何等の卑下なる耳」と。

〈趨走〉は、わが身は下役人となつて、長官に小走りで拜謁し、ここへ頭を下げる苦勞にたえられないの言う。〈地〉は、処とほぼ同じ。一に〈處〉に作る。〈氤氳〉は、香煙がゆらゆらとたちのほるさま。〈香〉は、御爐の〈香〉のこと。公は拾遺となつて、その班列は香案に近かつた。説は前に見える。〈滿眼〉は、二つのことをかけ

て、昔日はごくお側近くで（へ眼に満ち）ていたのを言い、またずつと懐かしく思い出され、眼前にあるかのようなと言う。（へ正に想ふ）は、（へ知らんと欲せば）を受けている。四字はびつたりと呼応しており、前詩の（へ羞將）と（へ笑）とが呼応しているのと、全く同じ対句法である。けれどし中書・門下の両省にいる昔の仲間が、もしも貶謫された今の状況を気の毒に思つて、（へ傷心）のほど如何ばかりか知りたければ、郡の役所をかけずりまわっているとき、朝廷での儀礼の様子をこのように想像して、まだありありと眼前に思い浮かべており、とりわけ懐いをなしたがたくしているのである。ああ、去年は何と清華であつたことか、今では何と卑陋の身の上であることか。時節柄、感慨が生じて（へ心）を（へ傷）ましめるゆえんである。

無路從容陪語笑

有時顛倒著衣裳

※從容：ユツタリトシテ 顛倒：トチレマチガヘテ

無路言官守懸隔。公前所云侍臣緩歩、退食從容、今憶其  
事、逸隔雲泥。故曰無路。深嘆二境界之異也。

從容、閑暇貌。反觀趨走。陪語笑、應入二鵷行。言陪諸公

待朝之閒、言談歡笑上。此直承正想句來。顛倒、諸公

裳、承欲知句、言期會奔走之急。詩齊風「東方未明、顛

倒衣裳」。蓋恐失二期會。致此此狼狽。吏務周章、動輒如

是也。嗚呼、省官清高、儼若神仙、真在青雲之上、與

風塵、俗吏事簿書期會者、復然星淵。追憶去年、茲辰、

恍惚如夢幻也。

（注27） 辭益「分類」に「官守懸隔して、両院の故人の欲に追陪することを得ず」と。宇都宮遷庵の増広本に挙げる。官守は、職務。

（注28） 訳注稿(三)、009「宣政殿退朝、晩に左掖を出づ」詩に「侍臣緩歩して青瑣より帰り、退食從容として出づること毎に遅し」と。

（注29） この言い方、例えば、白居易の「友を傷む」詩（『白氏文集』卷二）に「昔年洛陽の社、貧賤相提携。今日長安の道、対面雲泥を隔つ」と。下

文の星淵も同義。

（注30） 『史記』留侯世家に「張良嘗て間に從容として下邳の圯上を歩遊す」とあり、唐・司馬貞の索隱に「間は、閑字なり。從容は閑暇なり」と。

（注31） 『詩經』齊風「東方未明。ちなみに、顧宸「註解」に「衣裳を顛倒すは、即ち詩の東方未明に衣裳を顛倒するなり」と注した後、「四句俱に是れ（去歲茲の辰）を憶ふ」とし、「趨走」を内廷でのそれと解する。また張遠「會粹」（卷六）にも「此れ追つて拾遺為りし時を憶つて作る」とし、「趨走」の句、俗解に俱に説きて華州の掾、上官に趨謁すると為し、「顛倒」の句、此に頂すと。非なり。昔日趨走の地、今は心を傷ましむるに足れり。下の（無路）二句の意を含む。（顛倒）の句、亦た是れ心に君を忘れず、恍として朝謁の時の態の若き耳」と説いている。『註解』は宇都宮遷庵の両著に、『會粹』は詳説に挙げる。

（注32） ちなみに、『夜航詩話』卷三に「按ずるに青雲は本と晴天を謂ふ。因つて人の顯著なるを謂ふに、徳を以て言ふ者有り、位を以て言ふ者有り、又た世外高志を言ふ有り」として、それぞれの用例を挙げる。

（注33） ちなみに、『夜航詩話』卷三に「風塵も亦た數義有り」として、「兵乱を言ふ」「物外に対して人寰を謂ふ」「俗累を謂ふ」「泛く宦途を指して言ふ」「俗吏の職を謂ふ」「京官に対して郡県を謂ふ」「妓坊を謂いて風塵と為す」と説いている。なお、詩語としての（風塵）を論じたものに、松本肇「杜甫「風塵」考」（『筑波中国文化論叢』四、一九八四）があり、後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ―唐詩を読むために』（東方書店、二〇〇〇年）の中に「風塵」の項目（谷口真由美執筆）が立てられている。

（へ路無し）は、職務がまるつきり隔たつてしまつたことを言う。公は前に「侍臣緩歩」「退食從容」といつていたのが、今そのことを憶うと、はるか雲泥を隔てたようで、それゆえ（へ路無し）という。境遇が異なるのを深く嘆いているのである。（へ從容）は、のんびりと暇なさま。（へ趨走）に對比して際立たせている。（へ語笑に陪す）は、（へ鵷行に入る）に対応している。諸公に陪して朝儀を待つ間に、言談歡笑したことを言う。これは直ちに（へ正に想ふ）の句を承けて、會計処理に奔走することのあわただしさを言う。『詩經』齊風に「東方未だ明けず、

衣裳を顛倒す」と。けだし会計処理の期日を失せんことを恐れ、かかる狼狽ぶりを招いたのであろう。吏務にあたふたとして、とかくこのような具合であったのである。ああ、省官の清貴なること、神仙のようであり、まことに青雲の上において、塵埃にまみれた俗吏で帳簿をつけたり会計処理を仕事とする者とは、はるか天淵の差がある。去年のこの日を追憶すると、ぼうっとして夢か幻のようである。何人ソ錯テ認ム窮ム愁ヲ日ト 日日愁ハ随ニ一線ニ長カラシ

※窮愁日：メテタキヒカラ

六壬書「至日爲窮愁之日ト。窮、盡也。長至之日、陽長陰消ス、故謂之愁盡日ト。蓋言「家家慶賀忘憂、相歡一ト也。此翻案用之」。言茲「辰愁何ソ曾テ盡ン、乃愁ノ長スル日耳。不知何人錯リ認レ以爲「愁盡之日ト乎。蓋逢「佳節ニ乃倍ク傷ム心、愁之甚キ也。一線言至後暑始長。公ノ詩又云、刺繡五紋添「弱線ヲ、指ニ女工以驗コトヲ暑ノ用ニ時俗ノ事ヲ。文昌雜錄「唐ノ宮中以ニ女工ヲ揆ニ日之長短、冬至後日暑漸長、増ニ一線之功、是也。此言自是日日隨暑長、而吾愁亦應ニ添長キマ、逾ク不レ可堪也。古詩云、愁人苦ニ夜ノ長、今乃憂ニ日ノ長ニ甚シ矣。公之愁之切ナル也。此詩首二句言往ニ爲ニ拾遺ト之榮ヲ。中ニ一聯言今爲ニ掾吏ト之勞ト與中戀レ關レ思友下之切ナル。結挽「到ニ茲辰傷心ニ嘆「佳節卻添レ愁。二句無數ノ曲折。舊本認作「憶、日日作「愁日ニ、竝ニ非。今從「朱鶴齡「輯註本ニ改之ヲ。

(注34) 『唐詩貫珠』に見える。六壬は、占法の一。六壬書というのは一般的な言い方で、胡以梅の引くのが具体的にどういうものかは不明。

(注35) 邵宝「集註」及び薛益「分類」に「窮愁日とは、長至の日、陽長じ陰消す、故に之を愁尽る日と爲す」と。長至は、冬至のこと。「分類」は宇都宮遷庵の増広本に引く。

(注36) 王維の「九月九日山東の兄弟を憶ふ」詩(『唐詩選』卷七)に「佳節に逢ふ毎に倍ます親を思ふ」とあるのを踏まえた表現。

(注37) 「小至」詩(詳註卷十八)に、次のように見える。

天時人事日相催 天時人事 日相催す  
冬至陽生春又來 冬至 陽生じて春又た來たる  
刺繡五紋添弱線 刺繡の五紋は弱線を添へ  
吹霞六館動飛灰 吹霞の六館は飛灰を動かす  
岸容待臘將舒柳 岸容は臘を待ちて將に柳を舒べんとし  
山意衝寒欲放梅 山意は寒を衝きて梅を放たしめんと欲す  
雲物不殊鄉國異 雲物殊ならず郷國異なり  
教兒且覆掌中杯 兒をして且つ覆はしむ掌中の杯

(注38) 『唐詩貫珠』(卷五十一、冬至)に「小至」詩を載せ、「文昌雜錄」に曰く、唐の宮中、女工を以て日の長短を揆る。冬至の日暑漸く長く、常日に比して一線の功を増すと注す。但し、宋・龐元英「文昌雜錄」には見あたらない。『集千家注』(卷四)の「至日遺興」詩の注に「唐雜錄」としてほぼ同様の記事が見え、「小至」詩の錢注(卷十六)や「至日遺興」詩の輯註も「唐雜錄」として挙げる。『集千家注』は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。なお、『唐雜錄』のことは、胡仔「茗溪漁隱叢話」前集卷十、杜少陵五に引く黃庭堅の語に次のように見える。

至日に云ふ、「愁日愁は一錢に随つて長からん」と。釈する者謂ふならく「歲時記」に云ふ、「宮中紅線を以て日影を量り、至日は日影一線を増すと。而して『唐雜錄』に謂ふ、「宮中、女工を以て日の長短を揆る。冬至の後、日暑漸く長く、常日に比して一線の功を増す」と。

(注39) 晋・傅玄「雜詩」(『文選』卷二十九)に「志士は日の短きを惜しみ、愁人は夜の長きを知る」と。

(注40) 『唐詩貫珠』に「結びは挽きて茲辰傷心に到るなり」と。

(注41) 邵宝「集註」、薛益「分類」、錢注に「一に認に作る」と注す。また「日日」を「愁日」に作り、ともに「刊は日日に作る」と注す。

(注42) 輯註は宇都宮遷庵の増広本にも引く。

『六壬書』に「至日を窮愁の日と爲す」と。《窮》は、尽である。長至の日は、陽の気が生じ陰の気が極まり尽きる。されば、愁尽きる日という。けだし人々が慶賀し憂いを忘れて歡ぶことを言うのであろう。ここでは翻案して用い、《茲の辰》に《愁》がどうして尽き

ようか、かえって「愁」が「長」ずる「日」なのだ。「何人」が「錯り認」めて「愁」の尽きる「日」とするのかわからない、と言う。けれど佳節に逢うとかえってますます心を傷める、「愁」が甚だしいのである。「一線」は、冬至の後、日影がようやく「長」くなることを言う。公の詩に「刺繡五紋弱線を添ふ」と。女の針仕事は日の長短で進み具合をはかることを指す。当時の風俗を用いている。『文昌雜録』に「唐の宮中では女官の針仕事で日の長短をはかり、冬至の後日影がしだいに長くなるので、それに「一線」ぶん多くできる」とあるのが、それである。ここでは、これより「日」日影が「長」くなるにつれ、わが「愁」もやはり「長」じてゆき、いよいよがまんならなくなるだろうと言うのである。古詩に「愁人は夜の長きに苦しむ」とあるが、今はかえって日の「長」くなるのを憂うのが甚だしい。公の「愁」が切実であるからだ。この詩の首二句は、さきに栄えある拾遺となったことを言う。中二聯は、今は下役となつて苦労していることと朝廷を慕い友を思う気持ちの切実なことを言う。結びは、「茲の辰」の「傷心」に到り、佳節に却つて「愁」を増加させるのを嘆く。二句は無数の曲折がある。旧本は「認」を「憶」に作り、「日」を「愁日」に作るが、いずれもよくない。今、朱鶴齡の輯註本に従つてこれを改める。

023 (其二)

憶<sup>レ</sup>昨<sup>レ</sup>逍遙<sup>ニ</sup> 供奉<sup>ノ</sup>班<sup>ニ</sup> 去年今日侍<sup>ニ</sup>龍顔<sup>ニ</sup>

※昨<sup>レ</sup>…キノフマデハ 逍遙<sup>ニ</sup>…ユツタリ 供奉<sup>班</sup>…オツバノレツ

昨<sup>レ</sup>指<sup>ニ</sup>今夏放黜以前<sup>ヲ</sup> 雖<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>半歲<sup>ヲ</sup> 猶如<sup>ニ</sup>昨日<sup>ノ</sup>也 逍遙<sup>ハ</sup>清閑優游之貌<sup>也</sup> 追憶<sup>ニ</sup>朝官之逍遙<sup>ヲ</sup> 益傷<sup>ニ</sup>郡掾之走趨<sup>ヲ</sup> 所以<sup>ニ</sup>特<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>二字<sup>ヲ</sup>也 供奉<sup>ハ</sup>拾遺之職<sup>也</sup> 唐<sup>ノ</sup>六典<sup>ニ</sup>拾遺掌<sup>ニ</sup>供奉諷諫<sup>ヲ</sup> 蓋近侍<sup>シテ</sup>事<sup>ニ</sup> 奉引導<sup>ヲ</sup> 幸<sup>ヲ</sup> 有<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>過失<sup>スル</sup> 則<sup>チ</sup>拾<sup>テ</sup>而進<sup>レ</sup>諫<sup>ヲ</sup>也 班<sup>ハ</sup>侍朝<sup>ニ</sup> 序列也 天顔<sup>稱<sup>ニ</sup>龍顔<sup>ト</sup></sup> 漢高祖故事<sup>也</sup> 拾遺<sup>ハ</sup>近臣咫尺<sup>ニ</sup> 天威

一、故<sup>ニ</sup>レ侍<sup>ニ</sup>龍顔<sup>ニ</sup> 曰<sup>レ</sup>昨日<sup>ト</sup> 去年<sup>ト</sup> 寓<sup>ニ</sup>流年之感<sup>ヲ</sup> 言<sup>ニ</sup>事<sup>ハ</sup> 猶如<sup>ニ</sup>昨<sup>ノ</sup>年<sup>ハ</sup> 已<sup>ニ</sup>一周<sup>スル</sup>也。

(注1) 何か基づくところあるのか、不明。ちなみに、宇都宮遯庵の詳説には「莊子」林希逸注の「逍遙は、優游自在を言ふ」というのを挙げる。

(注2) 『大唐六典』卷八、門下省の条に「左補闕左拾遺は供奉諷諫、乘輿に扈從するを掌る。凡そ令を發して事を掌ぐるに、時に便ならず、道に合はざる者有れば、大なるは則ち廷議し、小なるは則ち上封す。若し賢良の下に遺滞し、忠孝の上に聞こえざれば、則ち其の事状を条して之を薦言す」と。

こは、『唐詩實珠』に挙げるのに拠る。

(注3) 『唐詩實珠』に「唐六典」を挙げた後、「大約是れ朝廷に奉引近侍する者、過失する所有らば、則ち拾つて諫を進むるなり」と。

(注4) 『史記』卷八、高祖本紀に「高祖人と為り隆準にして龍顔」と。

(注5) 『左伝』僖公九年に「天威、顔を違ること咫尺ならず」と。

「昨」は、今夏の放黜以前のことを指す。すでに半年を経てはけれども、なお昨日のことのようであるのだ。「逍遙」は、清閑優游のさま。朝官の「逍遙」たるを追憶し、ますます州の下役の身でかけずり回っているのを傷んでおり、特にこの二字を置くゆえである。「供奉」は、拾遺の職。『唐六典』に「拾遺は供奉諷諫を掌る」と。けれど近侍して事に供し、行幸の先導をつかさどり、過失があれば、それを拾いあげて諫書を進めるのである。「班」は、朝廷に侍する序列である。天子の顔を「龍顔」と称するのは、漢・高祖の故事。拾遺は、天子のつい目と鼻の先、ごくお側近くにいるので、「龍顔」に侍す」という。「昨」といい、「去年」というのは、年月の流れに對する感慨を寓する。つい昨日の事のようにあるが、年はもう一回りしたことを言うのである。

麒麟<sup>不<sup>レ</sup>動</sup> 動爐煙<sup>上</sup> 孔雀徐<sup>テ</sup>開<sup>テ</sup>扇影還<sup>ル</sup>

※不動<sup>ニ</sup>…ドツシロトシテ 徐<sup>テ</sup>…ソロリト

折<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>麒麟爐孔雀扇<sup>ヲ</sup> 麒麟<sup>ハ</sup>瑞獸、御爐<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>鑄<sup>ス</sup>、不動<sup>ニ</sup>二字<sup>ヲ</sup>妙<sup>ナリ</sup> 見<sup>ニ</sup>器<sup>之</sup>之重大、鑄<sup>之</sup>之巧妙<sup>ヲ</sup> 言<sup>ニ</sup>其勢殆欲<sup>ニ</sup>活動<sup>セント</sup> 而帖然<sup>トシテ</sup> 能不<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>

動也。且未言爐ヲ、只曰麒麟ト。是活物、則當動而不動、語法尤工。又與上ノ字一有開合ニ亦妙。上ハ言風靜ニシテ、裊裊トシテ而揚ル。孔雀ハ文禽、緝テ其尾ヲ爲扇ト。天子升殿ニ、兩詔容以扇擁障ス、詳ニ見テ于前ニ。舊用ニ雉尾扇ヲ。開元ノ初、改テ用ニ繡孔雀。徐開テ扇影還ハ、宸儀坐定テ、乃徐ニ開分レ、於是ニ竝ニ捧退キ還テ入レ内ニ也。影ノ字見テ隨テ歩光閃ニ金翠浮動スルヲ。還ノ字亦見ニ金蓮雍容曳レ裳ヲ而去。宛然如觀。總テ是八面玲瓏ノ活句、觀止ム矣。此皆去年今日侍朝所見、追憶シテ言レテ之。

(注6) ちなみに、『詩轍』巻五、句法に「用字有二折開之法」。老杜、麒麟不動爐煙上、孔雀徐開、扇影還。麒麟、香爐、孔雀尾扇ヲ折開シタリ。(中略)折開ハ字ノ連綿スル間ヲ、佗字ヲ以テワルナリ」云々と。

(注7) 『唐詩實珠』に「杜詩積義に曰く、麒麟は瑞獸、御爐の鑄る所なり」と。

(注8) 『杜詩積義』については、未詳。訳注稿(三)、007「臘日」詩の(注1)参照。『夜航詩話』巻三に「杜詩に「麒麟動かず爐煙の上」と。大明宮の朝儀を言ふ。爐は元と動かざるは、言を須ひず。而して特にへ動かさず」と曰ふ者は、其の勢ひ殆ど活動せんと欲して帖然として能く動かざるを言ふなり」と。

(注9) 開合は、詩学用語で展開、収束等の変化をいう。開闔とも表記する。

(注10) 『訳注稿』(三)、010「紫宸殿退朝の口号」詩。

(注11) 『大唐六典』巻十一、殿中省、尚釐局の条に「孔雀扇一百五十有六。左右に分居す。旧と雉尾扇。開元の初め、改めて繡孔雀と為す」と。輯註に挙げ、宇都宮遷庵の増広本にこれを引く。なお、詳説には「会粹」(巻六)に挙げるのを引く。

(注12) 金翠は、昭容が頭につけている金や翡翠の髪飾り。『文選』巻十九、曹植の「洛神の賦」に「金翠の首飾を戴き、明珠の耀輝を綴る」と。

(注13) 金蓮は、『南史』齊紀下、廢帝東昏侯に「金を鑿つて蓮華と為し以て地に帖し、潘妃をして其の上を行かしめて曰く、此れ歩歩金蓮を生ずるなり」と見える。ここでは、昭容の小さな足、もしくはその歩きぶりをいう。雍容は、ゆったりとしたさま。

(注14) もとは、四方に窓が多く広々として明るいこと。転じて明々白々で完全無欠であること。八窓玲瓏ともいう。なお、活句は活発生動の句。もとは

禪語。『滄浪詩話』詩評の荒井健訳注参照。  
(注15) 『左伝』襄公二十九年に、呉の公子、季札が舜の樂たる韶箏を舞うのを見て感嘆していつた言葉の中に、「觀止む矣。若し他樂有るも、吾れ敢へて語はざる已」と。

「麒麟爐」(孔雀扇)をそれぞれ二つに分けて用いる。「麒麟」は瑞獸で御爐に鑄造されたもの。「不動」の二字が絶妙である。器物の重く大きいことや鑄造の巧さが見て取れる。まるで今にも動き出しそうな勢いで、それがどつしりとして「動」かないことを言う。それにいまだ「爐」と言わないで、ただ「麒麟」というのだが、これは活物で、当然「動」くはずだが実際は「動」かず、語はとりわけ巧みである。また「上」の字と開合があるのも絶妙である。「上る」は、風が静かですらゆらと揚がることを言う。「孔雀」は、綾模様のあるきれいな鳥で、その尾をあつめて「扇」にする。天子が昇殿される際、二人の昭容が「扇」で覆いさえぎる。詳しくは前に見える。もとは雉尾扇を用いたが、開元の初めに改めて繡孔雀を用いるようになった。「徐ろ」(おもむ)に開いて扇影還るは、天子が着座されて、ようやく「徐ろ」に「開」き分かれ、そうしてともにそれを捧げて退き「還」つて内に入るのである。「影」の字は、歩むにつれ光きらめき金や翡翠の飾りがゆらめくのをあらわす。「還」の字も、ゆったりと裳裾を曳いて去るのをあらわす。あたかも目のあたりみるかのようだ。すべて八面玲瓏の活句で、これ以上のものはない。これはいづれも「去年」の「今日」、朝廷に侍つて見たものを追憶して言う。

玉几由來天ノ北極 朱衣只在殿ノ中間

※玉几：オキヤウソク 北極：オクブカシ 朱衣只：オメツケバカリ  
上ノ句言「天子穆穆之狀」下ノ句言「朝儀嚴肅之勢」。玉几、天子所憑。尚書顧命「王憑玉几」。西京雜記「漢制天子玉几、冬ハ則加錦錦」。天ノ北極ハ言「非復人間之境」。曰「天曰北、以三高仰與北面」言レ之。蓋御座肅穆深遠、如「處天之北極」、而朝臣

參謁、如<sup>ニ</sup>衆星ノ環拱<sup>スル</sup>也。朱衣ハ指<sup>ニ</sup>殿中侍御史<sup>ヲ</sup>。唐書職官志<sup>（注20）</sup>殿中侍御史六員、掌<sup>ル</sup>殿廷供奉之儀式<sup>ヲ</sup>。凡冬至元正ノ大朝會<sup>ニ</sup>、則具<sup>テ</sup>服<sup>ヲ</sup>升<sup>ル</sup>殿<sup>ニ</sup>、糾<sup>テ</sup>察<sup>ス</sup>非違<sup>一</sup>。又輿服志<sup>（注21）</sup>其公服、緋衫ト、是也。百官<sup>ハ</sup>皆班<sup>ス</sup>於殿廷<sup>ニ</sup>。御史獨升<sup>ル</sup>殿<sup>ニ</sup>、具瞻儼然<sup>（注22）</sup>。故<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>只在<sup>ニ</sup>殿<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>。夫<sup>レ</sup>御史<sup>ハ</sup>爲<sup>ニ</sup>風霜之任<sup>（注23）</sup>、百僚所<sup>レ</sup>震恐<sup>ス</sup>、官之雄峻、莫<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>比<sup>ス</sup>ル<sup>一</sup>焉。其在<sup>ニ</sup>殿上<sup>一</sup>、儼然相臨<sup>ク</sup>、緋衫炫曜、嚴威稜稜、令<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>肅肅<sup>（注24）</sup>。在<sup>ニ</sup>言外<sup>一</sup>矣。二聯皆自<sup>ニ</sup>前首<sup>ノ</sup>正<sup>ニ</sup>想<sup>（注25）</sup>生<sup>シ</sup>來<sup>ル</sup>。

〔注16〕「礼記」曲礼上に「天子は穆穆たり、諸侯は皇皇たり」と。孔穎達の疏に「穆穆は威儀多き貌」。

〔注17〕「尚書」顧命に「皇后玉几に憑る」と。皇后は大いなる君の意で、周の成王を指す。ここは、『唐詩貫珠』に挙げるのに拠る。

〔注18〕『西京雜記』巻上に「漢制、天子は玉几。冬は則ち綿錦を其の上に加ふ。之を綈几と謂ふ」と。綿錦は、厚く織つた錦。ここは、『唐詩貫珠』に挙げるのに拠る。

〔注19〕『唐詩貫珠』に「玉几由来天の北極」は、一に由来天の北極の如くして而して朝臣衆星の如く環拱するを言ふ。一に御座爾穆深遠、天の北極に処るが如きを言ふ」と。衆星は、『論語』為政篇の「政を為すに徳を以てするは、譬へば北辰の其の所に居て、衆星の之を共するが如し」を踏まえる。

〔注20〕『唐詩貫珠』に挙げる。『旧唐書』卷四十四、職官志三に「殿中侍御史六人。從七品下。（中略）殿中侍御史は殿廷供奉の儀式を掌る。凡そ冬至元正の大朝會は、則ち具服して殿に升る。郊祀巡幸の若きは則ち鹵簿中に於いて非違を糾察し、具服して旌門に従ひ、文物の虧闕する所有るを視れば、則ち之を糾す」と。元正は元旦。なお、『具服』を東陽は「服を具す」と訓じているが、『旧唐書』卷四十五、輿服志に「朝服」の下に「亦名具服」と注することからすれば、具服のままではよからう。

〔注21〕『唐詩貫珠』に挙げる。『旧唐書』輿服志にそのままの表現は見えないが、「六品以下、衫するに緋を以てす」とある。

〔注22〕具瞻の語は、『詩経』小雅・節南山に「赫赫たる師尹、民具に爾を瞻る」とあるのに基づく。

〔注23〕元・馬端臨（一二五四〜？）の『文献通考』卷五十三、職官考七、御史台の条に「隋及び唐は皆な御史台と曰ふ。龍朔二年（六六二）改めて憲台

と爲す。咸亨元年（六七〇）旧に復す。門北闢き、陰殺を主る。故に御史は風霜の任爲り、不法を弾糾し、百寮の震恐す。官の雄峻、之に比する莫し焉」と。

上の句は、天子の威厳ある様子を言い、下の句は朝儀の嚴肅なありさまを言う。〈玉几〉は、天子が凭りかかるもの。『尚書』顧命に「王、玉几に憑る」、『西京雜記』に「漢の制度では、天子は玉几を用い、冬には綿をつける」と。〈天の北極〉は、ふつうの人間世界ではないことを言う。〈天〉といい、〈北〉というのは、群臣が高く仰ぎみるのと天子が北面するのだから言う。けだし御座は厳かに奥深く、〈天〉の〈北極〉にあるかのようであり、朝臣が参謁するのは、多くの星がこれを取りまき拱手の礼をしているかのようである。〈朱衣〉は、殿中侍御史を指す。『唐書』職官志に「殿中侍御史は、六名。殿廷供奉の儀式を掌る。すべて冬至や元正の大朝會には、朝服を着て殿に昇り、非違を糾察する」、また輿服志に「その公服は緋衫」とあるのが、そうである。百官はみな殿廷に整列するが、御史だけは昇殿し、仰ぎ見るとおごそかである。されば〈只だ殿の中間に在り〉という。そもそも御史の職は風霜の任であつて、百官の恐れ震え上がるもの。官の雄々しく峻嚴なること、これに比肩するものはない。殿上にあつて、いかめしく睨みをきかせ、緋色の上衣がきらきらと耀き、おごそかでいつくしく、人を肅然とさせること、言外にあらわれている。この二聯はいずれも、前首の〈正に想ふ〉から生じて来たものである。

孤城此日堪腸斷<sup>（注26）</sup> 愁對寒雲白<sup>（注27）</sup> 滿山<sup>（注28）</sup>

※白…サビレテ

山<sup>ハ</sup>指<sup>ニ</sup>華山<sup>ヲ</sup>。在<sup>ニ</sup>州之西<sup>ニ</sup>。愁對寒雲白滿山、與<sup>ニ</sup>正想<sup>（注29）</sup>氣滿眼香<sup>（注30）</sup>。正<sup>ニ</sup>相反<sup>ス</sup>。不<sup>レ</sup>翅傷心<sup>（注31）</sup>。所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>腸斷<sup>（注32）</sup>。前六句追述<sup>（注33）</sup>去年至日之事<sup>（注34）</sup>。懷<sup>ス</sup>朝儀之盛<sup>（注35）</sup>。結乃述<sup>（注36）</sup>今日之傷感<sup>（注37）</sup>。言<sup>ニ</sup>孤城寂寥<sup>（注38）</sup>、謫官無聊、空山白雲、寒景凄然、獨坐相對<sup>（注39）</sup>、愁腸欲<sup>レ</sup>斷<sup>（注40）</sup>也。

一結淡然洗滌鉛華、亦得停勻之妙、而無限感慨、亦溢乎言表矣。白（注24）作雪、非ナリ。

〔注24〕『分類』及び錢注、輯註は「雪」に作り、輯註に「詩說雋永に云ふ、唐本杜詩、白に作ると」と注する。これは『集千家註』（巻四）に引く趙次公注に既に挙げる。『詩說雋永』は、南宋の詩話。著者不明。明・胡仔『茗溪漁隱叢話』後集巻八にも引く。

〈山〉は、華山を指す。州の西にある。〈愁ひて対す寒雲白くして山に満つ〉は、〈正に想ふ氤氳滿眼の香〉とまったく相反している。ただ〈傷心〉するのみならず、〈腸断ゆゑるゆえん〉である。前の六句は〈去年〉の〈至日〉のことを追述し、朝儀の盛大であることを追懐回想している。結びでやつと〈今日〉の感傷を述べ、〈孤城〉の寂寥として、貶謫された身でやるせなく、冬枯れた景色が寒々とし、ほつねんと独り向き合えば、〈愁い〉のあまり〈腸〉が〈断〉ちきれそうになるのを言うのである。結びはさつぱりと化粧を洗い落としていて、ここも均整の妙を得ており、無限の感慨が、やはり言表にあらわれている。〈白〉字、一に〈雪〉に作るのは、よくない。

### 024 恨別

此在蜀作。恨別家（注1）漂泊遠方、諸弟亦離散、不知在何處也。乾元二年十二月、公入蜀。按詩中五六年老、江邊二語、當在卜居之後也。虞（注2）公初至成都、未得所依、故以別爲恨。不知唐室板蕩、故園陷虜、雖得所依、豈不以別爲恨。公豈如下。估客胡商到處爲家、一タビ得醉飽、便不思鄉者乎。註家反爲作者之累、何其顛也。

〔注1〕宇都宮遜庵の増広本に挙げる明・単復の年譜に見える。

〔注2〕元・虞集（字は伯生、一二七二—一三四八）撰とされる『杜律虞註』の

こと。但し、これは虞集に偽託したもので、実際は明・張伯成の撰になるもの（『四庫全書總目提要』集部、別集類存目。寛文八年（一六六八）の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢詩集成唐詩第二輯』に影印を収む。そ

のなかに、「公、官を棄てて蜀に入る。未だ依る所を得ず。故に別れを以て恨みと為すなり」という。なお、邵傳『集解』も「公、蜀に入つて未だ依る所を得ず。故に別れを以て恨むことを賦す」と。

〔注3〕世が乱れること。板も蕩も、もとは『詩経』大雅の篇名で、ともに周厲王の無道な政治をそしめる歌。

〔注4〕估客は、船を使って移動し商いをする者。楽府題に「估客樂」がある。胡商はベルシヤの商人。

なお、133「蕩滌」詩に「估客胡商」の語が見え、東陽の詳解に「估は物価を論ずるなり。估客は時価を候つて以て利を射る者。江估、漕估、塩估等有り。皆物価の低昂に因つて、賤く買ひ貴く売るの徒。胡は本と西北夷の称。其の人貨を齎らして異邦に適き、留まつて肆を開いて交易す。唐の時、揚州常に波斯の胡店有り。想ふに亦た古へ既に之有り。後漢書馬援が伝に伏波は西域賈胡に類す。到る処輒止まる。是れを以て利を失ふ」と。是れなり。因つて遂に泛く賈を謂ひて胡と為す。辛延年が羽林郎の詩に將軍の威に依倚して、調笑す酒家の胡の如きに至つては、当爐の倡女を謂ひて胡と為す。故に胡姬の称有り。貨を齎ぐを商と曰ふ。胡商は只だ是れ行賈、必ずしも眞の賈胡ならざるなり」と。なお、「胡商」には「タビアキンド」と左訓を施す。

〔注5〕傾頤は、言葉がでたらめて正しくないこと。双声の語。例えば、『広韻』に「頤、傾頤。言語度無し」、『大広益会玉篇』に「頤は胡鈎の反。傾頤は、言正しからざるなり」と。

これは蜀での作。家郷に〈別〉れて遠方に漂泊し、弟たちも離散し、どこに居るのかわからないのを〈恨〉んだのである。乾元二年（七五九）十二月、公は蜀に入った。詩中の〈五六年〉〈江辺に老ゆ〉の二語を考えるに、当然次の「卜居」詩の後でなければならぬ。『虞註』には、公が成都にやつて来た当初、身を寄せるところがなく、それで別れを恨みに思つたのだという。わからぬのだろうか、唐朝は乱れ、故郷は胡虜の手に落ちたのに、身を寄せるところがあつても、どうして〈別れ〉を〈恨み〉に思わずにおられよう。公は、估客胡商の行く先々を家となし、存分に酔い腹一杯食うことさえできれば、

それで故郷のことなどつゆも思わない連中となんで同じであろうか。注釈家が逆に作者のわざわいとなる、何とてたらしめな言草か。洛城一別四千里 胡騎長驅五六十年

公曾祖以來居洛陽、有墳墓田園。故公雖生於長安、然公常指洛陽爲故郷。四一、作三。蜀成都距洛陽三千幾百里。胡騎、指安史之亂。自天寶十五歲安祿山反、其子慶緒及史思明父子繼起、至上元元年禍亂未平、已六年矣。去年秋、思明陷洛陽、故此詩哀之也。

〔注6〕 杜依藝のこと。「訳注稿」(一)、「杜文貞公伝」(注4)参照。

〔注7〕 訳注稿(一)、「杜文貞公伝」に「公、杜陵に生まる。其の田園は則ち洛陽に在り」と。なお、輯註(巻七)に宋・趙次公の注を引いて、「公田園有り洛陽に在り。故に洛陽を指して家と爲す」と。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注8〕 錢注(巻十一)及び輯註に指摘。輯註は宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

〔注9〕 何に基づいたか、不明。「元和郡縣圖志」巻三十一、劍南道、成都府の条には「東北のかた東都に至る二千八百七十里」と。

〔注10〕 薛益「分類」(巻一、紀行)に「胡騎は安祿山史思明の乱を指す」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

〔注11〕 安祿山が乱を起こしたのは、天寶十四載(七五五)十一月のことである。なお、「資治通鑑」巻二五、天寶三載の条に「春正月、丙申朔、年を改めて載と曰ふ」とあり、この天寶三載(七四四)から肅宗の至徳三載(七五八)二月まで載を用いた(この年の二月、乾元と改元し、載を年に復す)。

〔注12〕 安祿山・安慶緒父子については、『旧唐書』巻二〇上、「新唐書」巻二二五上に伝がある。天寶十四載十一月、范陽(北京で反乱を起こした安祿山は、十二月に洛陽を奪い、十五載一月に大燕皇帝と僭称。六月には長安を陥れた。しかし翌年の至徳二載(七五七)一月、部下の嚴莊・李猪兒に殺された。安慶緒は、祿山の第三子で、嚴莊らに擁立されたが、乾元二年(七五九)三月、史思明によって縊殺された。

〔注13〕 史思明は、突厥系の雜胡。安祿山とは同郷で、生まれたのも一日違いであったという。至徳二載、いったん唐朝に降ったが、乾元元年(七五八)

再び叛き、大聖燕王と僭称した。その年の九月に洛陽を占拠。上元二年(七六一)三月、子の史朝義に殺害された。史思明が末子の史朝清を溺愛して朝義を除こうとしたのに不安を抱いたためとされる。史朝義は、宝應二年(七六三)正月、李懷仙に追い詰められて縊死した。史思明・朝義の伝は、『旧唐書』巻二〇上、「新唐書」巻二二五上に見える。

公は曾祖以來洛陽に居住し、その地に墳墓や田園がある。されば公は長安で生まれただけども、つねに洛陽を指して故郷としている。〔四〕は、一に〔三〕に作る。蜀の成都は、洛陽から三千幾百里のかたにある。〔胡騎〕は、安史の乱を指す。天寶十五載(七五六)、安祿山が謀叛を起こしてから、その子の慶緒や史思明父子が相次いで起こり、上元元年(七六〇)になっても乱は平定されず、もう六年にもなる。去年は史思明が洛陽を陥れた。この詩は、そのことを哀しんでいるのである。

草木變衰 行劍外 兵戈阻絶 老江邊

※変衰：フユガレ 老：クチハテル 江辺：カタイナカ

宋玉九辨「草木搖落兮變衰」。公去年冬入蜀、故云。兼喻人事之變遷也。劍外、劍閣之外。入蜀路甚艱難、有大劔山小劔山、兩崖險峻、鑿石架閣、而爲棧道、故謂之劍閣、蜀道第一之危險。自中原言蜀、西在劍閣之外、故曰劍外。去歲當草木變衰之候、陵劍閣之險而來于蜀中、追嘆其艱難也。江謂錦江。浣花溪、一名。上元元年、公卜居于此。公自入蜀、爲寇亂所阻、與家鄉絶。遂居之。故曰老江邊。時公年四十八矣。

〔注14〕 「楚辭」および「文選」巻三十三。宇都宮遯庵の増広本は、薛益「分類」に挙げるのを引く。

〔注15〕 邵傳「集解」に、劍外の下に「劍閣の外」と注する。「分類」にも見える。

〔注16〕 「大明一統志」巻六十八、保寧府、古蹟の条に劍閣の項あり、「劍州の北三十里に在り。兩崖峻拔、石を鑿つて閣を架して棧道を爲り、連山絶險、

故に之を劍閣と謂ふ」と。閣は、かけはし。宇都宮遷庵の増広本にこれを挙げる。

(注17) 邵傳『集解』に、「江辺の下に「錦江の辺」と注する。邵室『集註』及び薛益『分類』にも見える。但し、宇都宮遷庵の増広本に「集註分類共に云ふ、浣花溪、一名は錦江と。一統志の浣花溪の註に是の説無し」という。

(注18) 宇都宮遷庵の増広本に挙げる明・単復の年譜に見る。  
(注19) 上元元年当時、杜甫は四十九才である。東陽の勘違い。

宋玉の「九弁」に「草木揺落して変衰す」と。公は、去年の冬、蜀に入ったので、かくいう。同時に人の身の移ろいに喩えているのである。〈劍外〉は、劍閣の外。蜀に入る路はとてもは難儀で、大劍山・小劍山があり、両崖は険峻で、石を鑿ち架閣して棧道としたので、これを劍閣という。蜀道第一の難所で、中原から蜀を言えば、西のかた劍閣の外にあるので、〈劍外〉という。去年〈草木変衰〉する季節、劍閣の険を越えて蜀にやってきた。今、その難儀であったことを追懐して嘆じているのである。〈江〉は、錦江のこと。浣花溪の別名。上元元年(七六〇)、公はこの地に居を卜した。公が蜀に入つて以来、外寇内乱に阻まれ、家郷との消息が絶えてしまった。そのまま浣花溪の地を下して草堂をかまえて住んだ。それゆえ〈江辺に老ゆ〉という。時に公年四十八(九)であった。

思家<sup>レ</sup>歩<sup>レ</sup>月<sup>ニ</sup>清宵<sup>ニ</sup>立<sup>ニ</sup> 憶<sup>レ</sup>弟<sup>ヲ</sup>看<sup>テ</sup>雲<sup>ヲ</sup>白晝<sup>ニ</sup>眠

家<sup>ハ</sup>指<sup>ニ</sup>洛陽<sup>ヲ</sup>。哀<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>陷<sup>ル</sup>賊<sup>ニ</sup>。夜<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>寐<sup>コト</sup>。起<sup>テ</sup>歩<sup>シ</sup>月下<sup>ニ</sup>。清宵<sup>ニ</sup>獨立<sup>シ</sup>悵然<sup>タル</sup>也。公有<sup>ニ</sup>四<sup>ノ</sup>弟<sup>ニ</sup>。曰<sup>ク</sup>穎<sup>觀</sup>豐<sup>占</sup>ト。唯<sup>レ</sup>占<sup>ヲ</sup>從<sup>テ</sup>公<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>蜀<sup>ニ</sup>。三<sup>ノ</sup>弟<sup>ハ</sup>各<sup>ハ</sup>散<sup>リ</sup>在<sup>リ</sup>他<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>。不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>漂<sup>シ</sup>泊<sup>ス</sup>何<sup>ノ</sup>處<sup>ニ</sup>。公憶<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>弟<sup>ヲ</sup>詩<sup>ヲ</sup>有<sup>リ</sup>。弟<sup>皆</sup>分<sup>散</sup>。無<sup>シ</sup>家<sup>ヲ</sup>問<sup>フ</sup>死<sup>生</sup>ヲ。故<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>依<sup>テ</sup>悵<sup>望</sup>。泣<sup>テ</sup>對<sup>シ</sup>浮<sup>雲</sup>。骨肉<sup>之</sup>情<sup>、</sup>尤<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>懷<sup>ニ</sup>。無<sup>シ</sup>聊<sup>ノ</sup>之<sup>極</sup>。蒙<sup>シ</sup>被<sup>テ</sup>而<sup>レ</sup>眠<sup>ス</sup>。是<sup>レ</sup>顛<sup>ニ</sup>倒<sup>シ</sup>晝<sup>夜</sup>之<sup>常</sup>。恨<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>之<sup>切</sup>。無<sup>シ</sup>可<sup>シ</sup>奈<sup>ハ</sup>何<sup>ス</sup>也。胡元瑞<sup>云</sup>。一<sup>ノ</sup>聯<sup>ト</sup>太<sup>ク</sup>板<sup>、</sup>若<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>易<sup>キ</sup>而<sup>レ</sup>學<sup>レ</sup>之<sup>、</sup>誤<sup>リ</sup>後<sup>生</sup>矣。沈歸愚<sup>云</sup>。若<sup>シ</sup>說<sup>ハ</sup>若<sup>シ</sup>何<sup>ノ</sup>思<sup>ハ</sup>若<sup>シ</sup>何<sup>ノ</sup>憶<sup>ト</sup>。情<sup>事</sup>易<sup>レ</sup>盡<sup>。歩<sup>レ</sup>月<sup>ニ</sup>看<sup>レ</sup>雲<sup>ヲ</sup>有<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>言<sup>シ</sup>神<sup>傷</sup>之<sup>妙</sup>。顧修遠<sup>云</sup>。曰<sup>ク</sup>歩<sup>シ</sup>。</sup>

又曰<sup>ク</sup>立<sup>ト</sup>、曰<sup>ク</sup>看<sup>ト</sup>、又曰<sup>ク</sup>眠<sup>ト</sup>、徘徊無聊、忽行忽止、忽起忽臥、顛倒錯亂、不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>定<sup>コト</sup>。二語寫<sup>シ</sup>盡<sup>シ</sup>悵<sup>状</sup>。

(注20) 顧宸『註解』に「公、四弟有り。穎・觀・豐、皆乱を他郡に避く。惟だ占のみ公に従つて蜀に入る」と。なお、錢注の「少陵先生年譜」には「甫の弟に穎・觀・豐・占有り。未だ行列を知らず」と。行列は、兄弟順。ちなみに、杜甫が具体的に弟たちの名を挙げて詠じた詩として、広徳元年(七六三)作の「舍弟占、草堂に帰りにて檢校す。聊か此の詩を示す」(評註卷十二)、広徳二年作の「舍弟穎の齊州に赴くを送る。三首」(卷十四)、大暦元年(七六六)作の「第五弟豊、独り江左に在り、近三四載、寂として消息無し。使を宛めて此を寄す。二首」(卷十七)、大暦二年作の「舍弟觀が書を得るに、中都自り江陵に達し、今茲暮春月末に行季合に夔州に到るべしと。悲喜相兼ね、困円待つ可し、詩を賦して事に即す。情は詞に見る」(卷十八)、「觀が即ち到らんとするを喜び、復た短篇を題す、二首」(同上)、「舍弟觀、藍田に歸りて新婦を迎ふ、送りて示す。二首」(卷十九)、「舍弟觀、藍田に赴き妻子を取り江陵に到ると、喜びて寄す三首」(卷二十一)、大暦三年作の「遠く舍弟穎・觀等を懐ふ」(同上)、「統じて觀が書を得、當陽の居止に迎へ就かしむ。正月中旬、定めて三峽を出でんとす」(同上)等の諸作がある。さらに杜甫には、弟だけでなく、そのほかに韋氏に嫁いだ妹がおり、至徳二載(七五七)作の「元日韋氏の妹に寄す」詩(卷四)がある。なお、杜甫の弟について考証した論文に、周睿「杜甫舍弟行踪考略」(「杜甫研究學刊」二〇〇四年第一期)がある。

(注21) 乾元元年(七五八)、秦州(今の甘肅省天水県)での作「月夜舍弟を憶ふ」詩(評註卷七)に、次のように見える。

戍鼓絶人行 戍鼓 人行絶ゆ  
邊秋一雁聲 辺秋 一雁声あり  
露從今夜白 露は今夜從り白し  
月是故鄉明 月は是れ故郷のごと明らかなり  
有弟皆分散 弟有り皆分散し  
無家問死生 家の死生を問ふ無し  
寄書長不達 書を寄せるも長く達せず  
況乃未休兵 況んや乃ち未だ兵を休せしめざるをや  
胡元瑞は、明・胡應麟(字は元瑞。一五五二〜一六〇二)のこと。その

著『詩數』内篇卷五、近体中、七言に「杜の（桃樹に題す）等の篇、往往にして解す可からず。然れども人多く之を知る、後生を誤るに足らず。惟だ中に太だ板なる者有り。家を思ひ月に歩して清宵立ち、弟を懐ひて雲を看て白日眠るの類の如し。太だ凡なる有り、朝罷めて香煙満袖を携へ、詩成り珠玉揮毫に在り」の類。若し其の易きを以て之を学ばば、患を為すこと斯に大にして、拈出せざるを得ざるなり」と見える。〈板〉は、平板。変化に乏しく生動性に缺ける意。なお、『詩數』には、貞亨三年（一六八六）刊の和刻本があり、汲古書院刊『和刻本漢籍隨筆集』第十九集に影印を取む。

〔注23〕『杜詩偶評』（巻四）に「若し如何が思ふ如何が憶ふと説けば、情事尽くし易し。月に歩み雲を看る、言わずして神傷むの妙有り」と。

〔注24〕顧宸『註解』に「夜立ち昼眠る、昼夜其の常を失ふ。歩と曰ひ又た立と曰ひ、看と曰ひ又た眠と曰ふ、徘徊無聊、忽ち行き忽ち止まり、忽ち起き忽ち臥す。顛倒錯乱、自ら定むること能はず。二語善く恨の状を写す」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

〈家〉は、洛陽を指す。賊の手に落ちたことを哀しんで、夜寝つかれず、起きてへ月光の下をへ歩き回り、へ清宵にひとりしよんぼりへ立つている。公には弟が四人いて、穎・觀・豊・占という。ただ占のみが公に従って蜀に入ったが、他の三人は散り散りばらばらとなり、どこに漂泊しているのかわからない。公の「諸弟を憶ふ」詩に「弟有り皆分散し、家の死生を問ふ無し」とある。されば、弟たちのことが気懸かりで遠くを眺め、涙ながらに浮雲をみて、肉親を氣遣う情にたえきれない。やるせなさのあまり、布団をかぶって眠ってしまう。これは昼夜さかさまになった状態である。へ別れを恨むことが切実であつて、どうしようもないのだ。胡元瑞が云う、「この一聯は甚だ平板で、もしも平易であるからといってこれを真似すると、後進を誤ってしまう」。沈歸愚が云う、「もし何々と思つ、何々と憶うと言へば、心もちを言い尽くすのは容易だ。そうしないので、へ月に歩しへ雲を看る」というのは、言わず語らずして、心を傷めていることがわかるという妙味がある」。顧宸が云う、「へ歩」と

いつてからへ立」といい、〈看〉といつてからへ眠」という、やるせなくうろろとして、歩いたかと思つと立ち止まり、起きたかと思へば横になる。顛倒錯乱して、落ち着くことができない。二語はへ恨み」のありさまをみごとに表現し尽くしている」と。

聞レ道ヲ河陽近ノ乗ルト勝ニ

道ハ言也。聞ハ道聞ニ人ノ傳説ヲ也。河陽ハ河南地名。乘ハ勝ニ言レ得

タル破竹之勢。乾元二年十月、司徒李光弼悉レ軍ヲ赴テ河陽ニ、大

破二史思明ヲ。明年進テ圍ニ懷州ヲ。三月破ニ安太清ヲ於城下ニ。四月又

破ニ史思明ヲ於河陽ノ西渚ニ。其勢將ニ遂ニ復ニ洛陽ヲ。公之喜可レ知

矣。幽燕ハ河北ノ州名、安史之巢穴也。公傳ニ聞テ河陽之捷ヲ、竊ニ冀

フ司徒乘レ勢ニ不レ失機ヲ、速ニ進テ兵ヲ而北、直ニ搗ニ賊ノ窟穴ヲ、則

胡騎平テ而洛城復セン矣。特ニ下ニ急ノ字ヲ、乘勝ニ破竹之勢、萬萬

不レ容ニ更ニ緩ニ也。初祿山之反、光弼與ニ郭子儀、請テ引テ兵ヲ北取ニ

范陽ニ覆セント其巢穴ヲ、惜ラ玄宗不レ用ニ其策ヲ、遂ニ致シ失ニ天下

一。公蓋思之ヲ、冀ニ其行ニ于今ニ、所ニ以殷勤ニ屬ニ望ヲ也。

〔注25〕「夜航詩話」巻三にも「聞レ道は、人の其の事を道ふを聞くなり。聞レ

説・聴レ説、並に同じ。見レ説は、親しく其の之を説くを見る。風声を伝聞するに非ざるを言ふなり。梅莊の詩語解に、道・説は並に助語と。謬れりと説く。梅莊は、積大典の字。但し、聞道の道は意味のない接尾語とするのが妥当。

ちなみに三浦梅園『詩轍』巻六、雜記に「見説聞説聞道ノ類、道モ説モイフノ意ニシテ、見モ聞モ同クキク也。見レ説ハ俗語ニシテ、小説類ニ多ク見エタリ。見ヲ聞ト訓スル事、字書ニハ餘リ見エ子共、論衡、世見ハ黃帝好ト方術ヲ、則謂ニ帝仙ト矣、又見ニ鼎湖之名ヲ、則言ニ龍迎ト黃帝ト矣、ナドアレバ、晩近ノ語ニハ非ズ。清ノ李燧ノ詩、鶯藏ニ密柳ニ聲難レ見、花隱ニ寒烟ニ色不レ分。世ニ是等ノ説道ノ類ヲ、虚字ト見テ、ナラクトヨミ、又解道ノ説道ニナドヨムモアレドモ、聞レ道ヲ聞レ説ヲナド実シテ説ベシ。是唐ノ時ノ語也」云々と指摘する。王充『論衡』は道虚篇。寛延三年（一七五〇）刊の和刻本がある。李燧及びその詩については、不明。『隨園詩話』補遺卷七にその名が見える李燧字は東生、号は青壘。一七

五三(一八二五)は、梅園より三十一歳年下となる。

(注26) 邵傳『集解』に見える。河陽は、今の河南省孟県の南。

(注27) 『晋書』杜預伝に「今、兵威已に振ひ、響へば破竹の如し。数節の後、皆刃を迎へて解く、復た手を著くる処無きなり」、『北史』周高祖紀に「軍を敵にして待ち、以て之を撃たば、必ず剋たん。然る後に破竹の勢ひに乗じて、鼓行して東すれば、以て其の窟穴を窮むるに足らん」と。

(注28) 李光弼(七〇六〜七六四)は、常州柳城の人。安史の乱を平定し、戦功第一とされる。『旧唐書』卷一一〇、『新唐書』卷一三六に伝がある。司空は、司徒・太尉とともに三公の一つで、人臣最高の名譽職。品階は正一品。至徳二載(七五六)、司空に任じられた。『輯註』に「李光弼が伝に、至徳二載、賊將留希徳を破り、檢校司徒を加へらる。乾元二年冬十月、軍を悉して河陽に赴き、大いに賊衆を破る。上元元年、進んで懷州を囲む」と。通鑑に上元元年三月に光弼、安太清を懷州城下に破る。四月又た史思明を河陽の西渚に破る」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。懷州は、今の河南省沁陽市。

(注29) 薛益「分類」に「幽燕は河北の州の名、史明が窟穴なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。

(注30) 郭子儀(六九七〜七八二)は、華州の人。安史の乱を平定するのに功績があった(『旧唐書』卷二一〇、『新唐書』卷一三七)。『資治通鑑』卷二一八、至徳元載六月の条に「郭子儀、李光弼が上言して、哥舒翰が潼関を固守して敵の進撃を阻んでいる間に、兵を引き北のかた范陽を取り、其の巢穴を覆さんことを請ふ」たが、哥舒翰の力を恐れた楊国忠が関を出て戦うよう進言し、玄宗もこれに従ったという記事が見える。そのため哥舒翰は潼関の守りを失い、結局、玄宗は蜀に逃れることになった。

〈道〉は、言である。〈道ふを聞く〉は、人が伝え言うのを聞く意である。〈河陽〉は、河南の地名。〈勝ちに乗る〉は、破竹の勢いを得たことをいう。乾元二年十月、〈司徒〉の李光弼が全軍を率いて河陽に赴き、大いに史思明を撃破した。翌年、兵を進めて懷州を包囲し、三月、安太清を城下に撃破した。四月、さらに史思明を河陽の西渚に撃破した。その勢いは今にも洛陽を回復せんばかりである。公の喜びようがわかる。〈幽燕〉は、河北の州名。安史の巢穴である。公

は河陽での戦捷を伝え聞いて、ひそかに願うよう、〈司徒〉がこのまま勢いに乗じて好機を失することなく速やかに兵を進めて北上し、直ちに賊の巢窟を突けば、〈胡騎〉は平定されて洛陽は回復されるだろう、と。特に〈急〉の一字を置いたのは、〈勝ちに乗じ〉た破竹の勢いを、どうあつても決して緩めてはならないという意からである。当初、安禄山が反した時、李光弼は郭子儀とともに兵を率いて北のかた敵の本拠地范陽を攻略し、その巢窟を覆さんことを請うた。残念ながら玄宗はその策を用いず、かくして天下を失うはめになつてしまつた。公は、けだしそのことを思い、今、実行されんことを願うのである。ねんごろに望みを託すゆえんである。

025 トス居

公入蜀之明年、上元元年、結廬於西郭、浣花谿<sup>(注1)</sup>。今先往相地<sup>(注2)</sup>始得其所也。楚辭「屈原有「卜居篇」、倚以爲題。時裴冕尹<sup>(注3)</sup>成都、爲公卜築焉。或<sup>(注4)</sup>以爲「嚴武」、非也。

(注1) 『新唐書』杜甫伝に「劍南に流落し、廬を成都の西郭に結ぶ」と。なお、原文は谿字の下の「」点と送り仮名「二」とを誤倒する。

(注2) 『集千家注』(卷七)の題注に趙次公の「楚辭に屈原卜居の一篇有り、公倚つて以て題と爲す」というのを挙げる。宇都宮遯庵の増広本にも引く。なお、清・崔述(一七四〇〜一八一六)は、『考古統説』卷一、「觀書餘論」(「崔東壁遺書」所収)のなかで漁父篇とともに後人の偽託と断じており、現在では屈原の作でないとするのが定説。

(注3) 字は草甫。河東の人(？〜七六九)。訳注稿(「杜文貞公伝」(注37)参照。裴冕が成都尹を務めたのは、郁賢皓『唐刺史考』に拠れば、乾元二年(七五九)〜上元元年(七六〇)三月までの間。

(注4) 『事文類聚』統集卷六、居処部、第宅の条に浣花草堂の項があり、「杜甫成都に在り、劍南節度使裴冕爲に西郭浣花溪をトシ草堂を作りて焉に居す。或いは以て嚴武と爲すは、非なり」と。『事文類聚』は、度会末茂『杜律評叢』(卷一)にも挙げる。また輯註に「鮑曰く、主人は裴冕なり。旧注に嚴武に作るは非なり」と。鮑は宋・鮑彪(字は文虎)のこと。『千家

注（巻七）に見える。なお、輯註は宇都宮遯庵の増広本に引く。

ちなみに、古川末喜「生業をうたう浣花草堂時代の杜甫」（林田慎之助博士古希記念論集編集委員会編、中国読書人の政治と文学）所収、創文社、二〇〇二年）に、「成都郊外の土地を新参者の杜甫に提供し、屋敷造りを援助してくれたのは、その地域の最高権力者であったと思われる」とし、まだ定説を見ないが「当時の成都尹・劍南節度使の裴冕（？一七六九）であつた可能性が高い」とする。この論考は浣花草堂での杜甫の暮らしぶりを知る上で大いに参考になる。

公は蜀に入った翌年の上元元年に、草堂を成都城西郭の浣花溪に結んだ。今まず出向いてその土地を下見し、やつと格好の場所を得たのである。『楚辞』に屈原の「卜居」篇があり、それによつて詩題とした。当時、裴冕が成都の長官で、公のために土地を探し築いてくれた。ある説に嚴武のことだとするのは、よくない。

浣花谿水水ノ西頭 主人爲ニトス林塘ノ幽

※ト：ミタテル

浣花谿一名百花潭、在成都府西南五里。梁益州記「谿上居人多造彩箋、故號浣花。公之居在浣花西岸。主人公自謂。或爲指裴冕、非也。ト、者灼龜以視吉凶也。此只謂擇善地而已。猶舟人候風曰占風也。公來谿頭、尋置草堂地上。既占谿水之勝、復喜林塘之幽、遂爲之定居也。

（注5）〈谿〉字、錢注（巻十一）及び輯註（巻七）は〈流〉に作り、輯註に「一に之に作り、一に溪に作る」と注する。

（注6）『大明一統志』卷六十七、成都府、浣花溪の項に「府城の西南五里に在り。一の名は百花潭」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。

（注7）何に見えるか、不明。059「將に成都の草堂に赴かんとして途中作有り。先づ嚴鄭公に寄す」詩五首其三（詳註卷十三）に於いて、仇兆鰲が引く『梁益記』に「浣水、湔江より出て、居人多く綵箋を造る。故に浣花谿と号す」とある。それと同じであろう。

（注8）『詳註』（巻九）に見える。

（注9）邵傳『集解』に「裴冕、蜀の節度事と爲る、故に主人と称す」とあり、

薛益「分類」（巻一、居室）にも「主人は裴冕なり」という。なお、輯註に「主人は裴冕なり。旧注に嚴武と作すは非なり」とする宋・鮑文虎の説を挙げた後、按語を加えて「史に上元元年三月、李若幽、裴冕に代はり成都の尹と爲ると。此に主人と云ふは、恐らく只だ是れ地主ならん。并に冕に非ざるなり」という。輯註は宇都宮遯庵の増広本にも引く。

もつとも、陳貽焮『杜甫評伝』第十三章第一節には、清・施鴻保『說杜詩說』（巻十八）の「詩中の主人は、明らかに裴を指す」とする説を挙げて、これに賛意を表する。

〈浣花谿〉は、別名を百花潭ともいい、成都府の西南五里にある。

『梁益州記』に「溪沿いに住む人々は多くが彩箋づくりに従事している。それで浣花と号する」と。公の住まいは、〈浣花〉の西岸にある。〈主人〉は、公自身のこと。或いは裴冕を指すするのは、よくない。〈ト〉は、亀甲を灼いて吉凶を視ることである。ここではただ善い土地柄を択ぶというだけのことだ。舟人が風向きをみるのを占風というのと同様である。公は〈溪〉の〈頭〉にやつて来て、草堂をこしらえる場所を探した。〈谿水〉に臨む景勝の地を占めている上に、〈林塘〉の〈幽〉なるを喜び、かくしてそれで〈居〉を定めたのである。

已ニ知出レハ郭ノ少ニ塵事一 憂ニ有ニ澄江ノ銷ニ客愁一

※塵事：ウルサキカ、リアヒ 銷客愁：タビノウサラナグサム

上句言「境之幽」出「郭」言「離成都之市」。公今來「相」地、未嘗「住」于此、便已「知」郊居「景」境清閑、不「似」城市之喧囂、無復俗累「相」擾、宜「優」游、以「卒」歲也。下句言「地之勝」。浣花之水、湛湛「洪」流、而「卜」居在「江」岸。勝「幽」致可「知」矣。謝眺詩「餘霞散成綺、澄江淨如練」。風景「娛」人、殊「有」若「趣」、足「以」慰「旅」懷、而「暢」中「幽」情也。公「詩」又云、「百花潭水即滄浪、亦賞其澄清」也。

（注10）『左伝』襄公二十一年に晋の叔向（羊舌肸）の語として「詩に曰く、優なる哉游なる哉、聊か以て歳を卒へん、知なり」とあり、杜預の伝に「詩

の小雅。言ふところは君子衰世に優游す、害を避け其の寿を卒ふる所以なり。是れ亦た知なり」と注するが、これは逸詩。

〔注11〕 宋玉「招魂」(「楚辭」、文選卷三十三)に「湛湛たる江水、上に楓有り」と見え、王逸の注に「湛湛は、江水浸潤するなり」と。なお、楓はブラタナス。

〔注12〕 「晩に三山に登つて京邑を還望す」詩(「文選」卷二十七)。

〔注13〕 後出029「狂夫」詩。

上の句は、その地の幽静なるをいう。へ郭を出るへは、成都の市内を離れることをいう。公は今やつて来て土地柄を下見した。これまでここに住んだことはないのだが、郊外の住まいは周囲が清閑で、城市の喧騒とはまるで異なり、俗累にかきみだされることもなく、のんびりと生涯を終えるのにぴったりだと、はやもうわかつたのである。下の句は、景勝の地であることを言う。へ浣花のへ水はゆつたりと流れ、へ居をへトへしたのはその岸辺である。景勝地の静かな趣がわかる。謝朓の詩に「餘霞散じて綺を成し、澄江浄くして練の如し」とある。風景が人を娛しませ、とりわけこのような趣があつて、旅懷を慰め幽情を暢べるに充分である。公の詩にさらに「云う、百花潭水即ち滄浪」と。これもやはりその澄みきつたありさまをめでているのである。

無数ノ蜻蜓齊上下シ 一雙ノ鴻鵠對沈淨ス

※無数：アマタノ 齊：オナジヤウニ 一雙：ツガヒノ 鴻鵠：オシドリ 對：ツレダチテ

此直承上而下。寫江上ノ開景。上下、低昂如春。沈浮、言年没旋泛。皆其自得之狀。公逍遙優游、故得下弄此開景。占ルコトヲ 觀物ノ樂也。此亦因物寓意也。

〔注14〕 「文選」卷五、左思「吳都の賦」の劉淵林注に「鴻鵠は、水鳥なり。色黄赤、斑文有り。短狐虫を食ふ。水中に在り。毒無し。江東の諸郡皆之有り」と。なお、正徳二年(一七二二)序、同五年跋の寺島良安「和漢三才図会」卷四十一、水鳥の部には、「大おしどり」と和訓を施し、「本綱、鴻

鵠、状、鴛鴦より大にして色紫多く、人家之を畜ふ。毛に五采有り。首に纓有り、尾に毛有り船形の如し。性、邪を尋ねて害を逐ふ。此の鳥専ら短狐を食す。乃ち溪中物を害する者を勅逐す。其の溪に遊ぶや、雄を左にし雌を右にし、隊伍乱れず、式度有る者に似たり」と、明・李時珍「本草綱目」(禽部第四十七卷)の記述を挙げた後、「未だ之を見ず」という。「本草綱目」は、宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

〔注15〕 顧宸「註解」に「蜻蜓水に点して上下斉しく飛び、鴻鵠相親しみ浮沈して自得す。物を観るの楽しみ又た此の如し」と。宇都宮遼庵の増広本にも引く。

これは直ちに上を承けて説き下しており、へ江への閑かな風景を描写している。へ上下へは、あがつたりさがあがつたりして白をつくような様子を言う。へ沈淨へは、沈んだかと思えばすぐに浮かぶのを言う。いづれもその自得のありさま。公はのんびりぶらぶらと気ままに過ごしており、さればかかる閑かな風景をめで、観物の楽しみを独り占めできた。これもやはり物によって意を寓しているのである。

東行萬里堪乘興ニ 須向山陰上小舟上

※堪乘興：オモシロカラシ

萬里橋在成都南八里浣花里之東。寰宇記昔諸葛亮送費禕聘吳、至此橋嘆曰、萬里之行、始于此矣。橋因是得名。山陰、浙江縣名。世說王子猷居山陰、雪夜乘興棹舟訪剡谿、戴安道。此暗合用之。應客愁爲結、融會入妙。公蓋欲遊吳越、暫且居蜀耳。公初至蜀、便已有言曰、此生那老蜀、不復定歸秦。必欲首邱。所素矢也。今所卜新居、東接萬里橋、故因此遂發遠行之想。冀他日世平得乘興自由、便萬里之行、直從此發舟、順流東下、向山陰去、則卜居于此尤爲便也。堪、字言其輕便。須、者預期之辭。小舟亦言其輕便也。

○山谷外集注「節度使崔寧妻冀國夫人任氏崇奉異僧。爲就谿流其衣、蓮花隨出潭中、因號流花谿」、又稱「百花潭」。

（注15）『元和郡県図志』卷三十一、成都府の条に「万里橋は（中略）県南八里に在り」と。錢注に見え、宇都宮遯庵の増広本は顧宸『註解』に挙げるの引く。

（注16）『太平寰宇記』卷七十二、劍南西道、益州、成都府の条に、「万里橋は州の西南二里に在り。亦た篤泉橋と名づく。橋の南に篤泉有ればなり。漢、費禕をして呉に聘せしむ。諸葛亮、之を祖す。歎じて曰く、万里の道、此の橋より始まる、と。故に万里橋と曰ふ」と。なお、費禕の記事は（注16）に挙げた『元和郡県図志』にも見える。

（注17）『詳註』及び『唐宋詩醇』（卷十五）に清・黄生の「暗に孔明・子猷の語を用ひ、融会して妙に入る」というのを引く。その著『杜工部詩說』（卷九）には「山陰乘輿、又た暗に孔明・子猷の事を用ふ。其の融会の妙、亦た天衣無縫なり」とある。

（注18）『世説新語』任誕篇、訳注稿(四)、017「鄭県の亭子に題す」詩の（注22）参照。

（注19）『詳註』及び『唐宋詩醇』（卷十五）に清・黄生の「暗に孔明・子猷の語を用ひ、融会して妙に入る」というのを引く。その著『杜工部詩說』（卷九）には「山陰乘輿、又た暗に孔明・子猷の事を用ふ。其の融会の妙、亦た天衣無縫なり」とある。

（注20）『詳註』及び『唐宋詩醇』（卷十五）に清・黄生の「暗に孔明・子猷の語を用ひ、融会して妙に入る」というのを引く。その著『杜工部詩說』（卷九）には「山陰乘輿、又た暗に孔明・子猷の事を用ふ。其の融会の妙、亦た天衣無縫なり」とある。

（注21）『敵公の入朝するを送り奉る十韻』詩（詳註巻十二）の第十七、十八句。首丘は、故郷に帰ることをいう。『札記』檀弓上に「太公、管丘に封ぜらる。五世に及ぶ比まで、皆反りて周に葬れり。君子曰く、樂は其の自りて生ずる所を樂しみ、礼は其の本を忘れず。古人の言へること有り、狐死するに正しく丘に首すと。仁なり」と。太公は、太公望呂尚のこと。管丘は、齊の地名。

（注22）『敵公の入朝するを送り奉る十韻』詩（詳註巻十二）の第十七、十八句。首丘は、故郷に帰ることをいう。『札記』檀弓上に「太公、管丘に封ぜらる。五世に及ぶ比まで、皆反りて周に葬れり。君子曰く、樂は其の自りて生ずる所を樂しみ、礼は其の本を忘れず。古人の言へること有り、狐死するに正しく丘に首すと。仁なり」と。太公は、太公望呂尚のこと。管丘は、齊の地名。

（注23）顧宸『註解』に「子猷が興、去かんと欲せば即ち去き、帰らんと欲せば即ち帰る。山陰の小舟、飄然として寄傲す。此の生那んぞ蜀に老いん、素より矢ふ所なり」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

（注24）『詩語解』卷下に、杜甫のこの句を例に挙げて、「先料之也」という。また『詩家推敵』卷之上に「須ノ字又意ノ所ノ欲也ト訓ゼリ。古来スベカラクノ訳アリ。能アタレリ。スベカラクト先工説トキハベシト返リ読ベカラズ。此ノ字人ニ対シテ言トキハ云々セヨトイフ意、吾事ニイフトキハ云々セントイフ意ナリ」とある。

（注25）『黄山谷詩集』外集卷十六、「老杜浣花谿図引」詩の「百花潭水冠纓を

洗ふ」句、史容の注に「杜詩に万里橋西の宅、百花潭北の庄」と。百花潭

の事、蓋し節度使崔寧の妻、冀国夫人、浣花溪の上に家す。夫人初め兒童為りしとき、異僧有り其の家に遇ふ。偏身瘡穢、夫人之を奉ずること甚だ謹なり。僧弊衣を持して謂ひて曰く、我が為に此れを濯へ、と。夫人即ち溪に就きて之を洗ふ。蓮花随つて潭中より出づ。貴と為るに及び俗に百花潭と呼ぶ」という。ここに引かれている杜詩は、「錦水の居止を憶ふ」二首其二（詳註巻十四）。

（注26）宇都宮遯庵の増広本に「一統志六十七、成都府、浣花溪は府城の西南五里に在り。一名百花潭。按ずるに吳中復が国夫人任氏の碑に記す、夫人微時一僧の汚渠に墮つるを見る。為に其の衣を濯ふに、百花潭に満つ。因つて其の潭を名づけて浣花と曰ふ。云々と。一統志は、『大明一統志』のこと。

なお、029「狂夫」詩の顧宸『註解』に「百花潭」について「旧註に冀国夫人の事を引く。即ち晔が妾任氏なり。宋人任正一が游浣花記に云ふ、百花潭は杜詩に見えたり。冀国に由つて名を得るに非ざるなり」云々と。宇都宮遯庵増広本「狂夫」詩に挙げる。任正一については、未詳。

〈万里〉橋は、成都の南八里、浣花里の東にある。『寰宇記』に「昔、諸葛亮は費禕が呉に使いするのを見送り、この橋までやつてきて、万里の行は、ここから始まると嘆じた」という。橋はそこから名を得た。〈山陰〉は、浙江の県名。『世説』に「王子猷が山陰にいた時、雪の降つた夜、興に乗じて舟に棹さし剡溪の戴安道を訪ねた」とある。ここでは暗にこの二つの故事を合わせ用いている。〈客愁〉に对应して結びとし、融合して妙境に達している。公は、けだし呉越に遊ぼうとして、しばらく蜀にいたのだ。公が蜀にやつてきた当初、すでに次のような言葉がある。「此の生那んぞ蜀に老いん、死せずんば定めて秦に帰らん」と。かならず故郷に帰ろうというのが、もとより立てた誓いである。今、〈ト〉した新〈居〉は、〈東〉は〈万里〉橋に接している。このため遠行の思いを発し、いつか世の中が平和になつて〈興に乗じ〉て思い通りにできたなら、そのまま〈万里〉の行程を、すぐさまここから舟を発して、流れに従つて〈東〉に下

り、〈山陰〉に向つて旅立とう。それならここに〈卜居〉するのがもつとも便利だと考えるのである。〈堪〉の字は、その軽便なるをいう。〈須〉は、あらかじめ期待する辞。〈小舟〉は、やはり軽便なるをいうのである。○『山谷外集』の注に「節度使崔寧の妻、冀国夫人任氏が異国の僧を崇奉し、かの僧のために涙で衣を洗ったところ、次々に蓮華が潭中より浮かび出て、それで浣花溪と号した。また百花潭と称した」とあり、旧注にこれを引いている。崔寧は大曆中の人で、杜撰さは全くのお笑い草だ。

026 堂成

往<sup>ニ</sup>所<sup>レ</sup>ト<sup>セシ</sup>郊居、今構<sup>テ</sup>堂<sup>ヲ</sup>落成<sup>ス</sup>也。此即所謂浣花ノ草堂也。

さきに見した郊外の住まいに、今や堂をしつらえて出来上がったのである。これがいわゆる浣花の草堂である。

背<sup>レ</sup>郭<sup>ニ</sup>堂成<sup>テ</sup>蔭<sup>ニ</sup>白<sup>レ</sup>茆<sup>一</sup> 縁<sup>テ</sup>江<sup>ニ</sup>路熟<sup>シ</sup> 俯<sup>ニ</sup>青<sup>レ</sup>郊<sup>一</sup>

※背郭：シロノウラテ 縁江：カハツタヒ 俯：ミオロス

背<sup>ハ</sup>猶<sup>レ</sup>負<sup>レ</sup>也。浣花谿在成都西郭外<sup>ニ</sup>、故<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>背<sup>レ</sup>郭<sup>一</sup>。蔭<sup>ハ</sup>蓋<sup>也</sup>也。

白茆覆<sup>レ</sup>屋<sup>ヲ</sup>、所謂草堂也。江<sup>ハ</sup>即浣花谿。俯<sup>ハ</sup>猶<sup>レ</sup>臨<sup>也</sup>也。俯<sup>ニ</sup>青<sup>レ</sup>郊<sup>一</sup>

言<sup>ニ</sup>野景在<sup>ニ</sup>眼下<sup>一</sup>。蓋堂憑<sup>レ</sup>高<sup>也</sup>也。公自去冬入<sup>レ</sup>蜀<sup>ニ</sup>、久寓<sup>ニ</sup>成都<sup>一</sup>

市中<sup>ニ</sup>。沿<sup>レ</sup>江<sup>ニ</sup>適<sup>レ</sup>郊<sup>一</sup>之路、往來經行<sup>已</sup>熟<sup>ス</sup>。今始<sup>テ</sup>成<sup>ニ</sup>堂<sup>ヲ</sup>于此<sup>ニ</sup>。

青郊之景、直<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>面前<sup>一</sup>。江頭往來之路、可<sup>レ</sup>指<sup>シ</sup>點<sup>シ</sup>而辨<sup>ス</sup>也。公好

用<sup>レ</sup>俯<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>皆妙。如<sup>レ</sup>江檻俯<sup>ニ</sup>鴛鴦<sup>一</sup>、杖藜俯<sup>ニ</sup>沙落<sup>一</sup>、遊目俯<sup>ニ</sup>大江<sup>一</sup>

四顧<sup>レ</sup>俯<sup>ニ</sup>層巒<sup>一</sup>。蓋自謝眺<sup>カ</sup>窓中列<sup>ニ</sup>遠岫<sup>一</sup>、庭際俯<sup>ニ</sup>喬林<sup>一</sup>上來也。

(注1) 〈白茆〉字、銭注(卷十一)及び輯註(卷七)は〈茅〉に作る。音義とも

に同じ。

(注2) 『唐詩貫珠』(卷三十六、幽居一)に「背は猶ほ負のごとし」と。

(注3) 邵宝『集註』(卷二十二、宮室類)および薛益『分類』(卷一、居室)に

「浣花谿は成都の城外に在り、故に郭に背くと曰ふ」と。『分類』は宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注4) 『唐詩貫珠』に見える。

(注5) 青郊の語、謝眺の「徐都曹に和す」詩(『文選』卷三十)に「軫を青郊の路に結びて、廻<sup>ニ</sup>蒼江の流<sup>レ</sup>を瞰<sup>ス</sup>」と。これは、輯註に挙げる。

(注6) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「公久しく成都の寺中に寓して、往來江路熟するなり」、顧宸『註解』に「公久しく寺中に寓す。往來經行、其の路已に熟すと。『分類』『註解』ともに、宇都宮逕庵の増広本に挙げ

(注7) 「王使君に陪して晦日江に泛<sup>ビ</sup>黄家の亭子に就く」二首其二(詳註卷十三)の第四句。

(注8) 「暇日小園に病を散ず。時に秋葉を種<sup>ル</sup>ゑんとして耕牛を督<sup>シ</sup>兼<sup>テ</sup>觸目を書す」詩(詳註卷十九)の第二十九句。

(注9) 「閬州の東樓の筵にて十一男が青城に往くを送り奉る」詩(詳註卷十二)の第七句。

(注10) 「冬、金華山の觀に到り、因つて故の拾遺陳公の学堂の遺跡を得たり」詩(詳註卷十一)の第七句。

(注11) 「郡内の高齋に閑居して、呂法曹に答ふ」詩(『文選』卷二十六)。

〈背〉は、負とほぼ同じ。浣花溪は成都の西郭の外にあるので、それで〈郭に背く〉という。〈蔭〉は、蓋である。〈白茆〉が屋を覆うのは、いわゆる草堂である。〈江〉は、ほかならぬ浣花溪。〈俯〉は、臨とほぼ同じ。〈青郊に俯す〉は、野外の景色が眼下に広がっているのをいう。けだし〈堂〉は高いところによりそっているのだろう。公は去年の冬に蜀に入ってから久しく成都の市中に仮寓していた。

〈江〉に沿い郊外にゆく道筋は、幾度も往來し、すっかり熟知している。今やつと〈堂〉がここに〈成〉った。〈青郊〉の景色は、すぐ面前にある。〈江〉のほとりの往來する路は、指し示してそれとはつきりわかる。公は好んで〈俯〉の字を用いるが、どれも絶妙だ。例えば、「江檻鴛鴦に俯す」「杖藜沙渚に俯す」「遊目大江に俯す」「四顧層巒に俯す」というような句があり、けだし謝眺の「窓中遠岫に列し、庭際喬林に俯す」から出たものであろう。

檜林礙<sup>レ</sup>日<sup>ヲ</sup>吟<sup>ス</sup>風<sup>ニ</sup>葉<sup>一</sup> 籠<sup>ニ</sup>竹<sup>一</sup>和<sup>レ</sup>煙<sup>ニ</sup>滴<sup>ル</sup>露<sup>ヲ</sup>梢<sup>一</sup>

※榿林：ハンノキバヤシ 籠竹：オホダケヤブ 滴：ボタ／＼

榿音歇、或ハ讀テ如ハ稽、非ナリ。木名。唯蜀ノ有之。不材ニシテ易

成、止可充薪ニ。蜀中記ニ玉壘ヨリ以東多榿木、易シテ成而可薪

ニシ、美蔭ニシテ而不害。益部方物記榿木ハ蜀地ノ所宜、民家時

之。不シテ三年ナラ可レ爲レ薪ト、疾種亟カ取ル、里人以爲利。礙ハ

日言繁枝美蔭、可レ爲レ夏堂涼翳ト也。公有憑テ何少府ノ覓ル榿

木栽テ詩曰、飽聞榿木三年大、與ニ致谿邊十畝陰。籠力

鍾反。蜀人名大竹曰籠竹ト。益部方物記ニ竹有數種、節閉容

八九尺者曰籠竹ト。和煙言拂煙霄、極稱榿之高也。綠

樹礙レ曰、風葉蕭颯、美竹和煙、露梢滴瀝、斯知夏堂爽涼、

不復知炎熱矣。是喜賞園物ヲ、預想夏興ト也。唐書本傳ニ於澆

花谿ニ種竹植樹、結廬枕江、然今所詠樹竹、卽前

首所云林塘幽、非新植ト也。

(注12) 南宋・周密(字は公謹、一二三二〜一二九八)撰『齊東野語』卷十一に

「杜詩の榿木を乞ふ詩に音無し。或いは読みて豈と作す。而れども韻書も

亦た此の字無し。集中に又た榿林日を礙ふ風に吟ずる葉と有り。鄭氏

の註に曰く、五來の反。若し然らば、當に歇字に作るべし。余嘗て陳体仁

端明に見ゆるに云ふ、前輩を見るに読みて歇韻の若くすと。頗る疑はしと

爲すも、後に劍南の詩を見るに、へ書を著して木品を増し、句を捜して榿

栽を覓むと有り。又た荆公の詩に云ふ、へ灌錦江辺に榿有り、小園封植

して華滋を付つと。益ます歇音然りと爲すを信ず。榿、惟だ蜀のみ之有

り、不才の木なり。或いは謂ふ即ち榕なりと云ふ」と。

ちなみに、陳体仁は、端明殿學士の陳存(字は体仁)のこと。劍南の詩

は、南宋・陸游の「園中の作」(劍南詩稿卷四十五)。但し、『劍南詩稿』

は、「木」を「水」に、「捜」を「披」に作る。荆公の詩は、北宋・王安石

(字は介甫、号は半山老人。一〇二一〜一〇八六)の「薛肇明秀才に榿木

を償ふ」詩(臨川先生文集卷二十七)。なお、『齊東野語』の記事は、

錢注にこれを挙げ、顧宸『註解』には「読みて豈と爲す」までを引く。宇

都宮遯庵の増広本は『註解』を引く。

また、明・楊慎『丹鉛總錄』卷四、花木類、榿木の条には、「姑蘇の守

溪王公濟之、閨に在りし日に、杜詩のへ聞きて知る榿木三年大なりとを

論じて、因つて先父に問ふ、榿木は蜀の産、榿字何音ぞ、と。先父曰く、

音は歇。守漢曰く、當に韻書に依つて榿と音すべし。先父曰く、音歇なる

は則ち郷人農夫皆之を知る。若し榿の音と爲さば、何の木なるかを知らざ

らん。因つて王荆公の榿木詩にへ灌錦江辺に榿有り、小園封植して華滋を

付つ。幸ひに桓魋の伐るを免れ、歲晩にして還た庾信の移すに同じうす

と曰ふを挙げ。王乃ち悦服す。蓋し王公平昔極めて荆公の詩文を愛す。而

れども此の詩、王公も亦た偶たま記憶せざるのみ」とある。王濟之は王鑿

(一四五〇〜一五二四)のことで、楊慎の父は、楊廷和(一四五九〜一五

二九)のこと。

(注13) 邵宝『集註』及び薛益『分類』に「榿は、木の名。不材にして成り易し。

止だ薪に充つ可し。蜀地の宜しき所なり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増

広本に挙げる。

(注14) 『蜀中記』は未詳。蔡夢弼『草堂詩箋』(卷十八)に見え、顧宸『註解』

にも引く。『註解』は宇都宮遯庵の増広本にこれを挙げる。玉壘は、山名。

今の四川省江堰市の西北。

(注15) 北宋・宋祁(字は子京、九九八〜一〇六一)撰『益部方物略記』のこと。

宇都宮遯庵の増広本には輯註に挙げるのを、また詳説には張遠『会粹』(卷

八)に挙げるのを引く。

(注16) 「何十一少府邑に憑りて榿木栽を覓む」詩(詳註巻九)。

草堂塹西無樹林 草堂塹西 樹林無し

非子誰復見幽心 子に非ざれば誰か復た幽心を見ん

飽聞榿木三年大 飽くまで聞く榿木三年大なるを

與致溪邊十畝陰 与に致せ溪辺十畝の陰

(注17) 輯註に見え、宇都宮遯庵の増広本にこれを引く。

(注18) 『旧唐書』卷一九〇下、文苑伝の杜甫伝。

榿、字音は歇。あるいは稽のごとく読むのは、よくない。木の名。

蜀地方だけにある。材木にはならないが成長がはやく、ただ薪にな

るばかりだ。『蜀中記』に「玉壘より東の地に榿木が多い。成長がは

やく薪になる。美しい木陰をつくり邪魔にならない。『益部方物記』

に「榿木は蜀に適したもので、民家に植えられている。三年も経た

ないうちに薪にできる。さつと植えてすぐに取る。里人はこれを重宝している」と。へ日を礙ふは、こんもりと繁った枝が夏には涼しい木陰をなすことをいう。公に「何少府に憑りて檀木栽を覓む」詩があり、「飽くまで聞く檀木三年に大なるを、与に致せ溪辺十畝の陰」という。へ籠は、力鍾の反。蜀人は大竹を名づけて籠竹という。『益部方物記』に「竹に数種類あり、節のあいだが八九尺になるのを籠竹という」とある。へ煙に和すは、霽のかかった空を払うことをいい、梢の高いことを称するのである。緑の樹木が「へ日」を「礙」いへ風」にそよぐ木の「葉」がさわさわと音をたて、美しい竹林が「煙」に「和」して、「梢」から「露」のしずくがぼたぼたと「滴」る、それこそ夏の草堂は爽快清涼で、炎熱知らずということがわかろうというものである。これは園にある物をめで、あらかじめ夏の興趣を想像しているのである。『唐書』本伝に「竹や樹を植え、川を背にして飯の住まいをこしらえた」とあるが、今詠じられている樹や竹は、前首に云う「林塘の幽」で、新たに植えたものではないのだ。

暫<sup>ラ</sup>止<sup>マ</sup>飛<sup>マ</sup>鳥<sup>ヲ</sup>將<sup>ニ</sup>數<sup>ニ</sup>子<sup>一</sup> 頻<sup>ニ</sup>來<sup>ル</sup>語<sup>ヲ</sup>燕<sup>定</sup>新<sup>巢</sup> 習<sup>一</sup>

※將：ヒキツレ

將<sup>ハ</sup>率<sup>也</sup>。鳥<sup>將</sup>數<sup>子</sup>。教<sup>ニ</sup>雛<sup>ヲ</sup>習<sup>レ</sup>飛<sup>也</sup>。語<sup>ハ</sup>燕<sup>ハ</sup>言<sup>ニ</sup>雌<sup>雄</sup>和<sup>鳴</sup>スル<sup>ヲ</sup>也。新<sup>堂</sup>纔<sup>成</sup>。葺<sup>レ</sup>茆<sup>始</sup>。始<sup>畢</sup>。鳥<sup>則</sup>將<sup>雛</sup>來<sup>習</sup>。暫<sup>止</sup>屋<sup>上</sup>。習<sup>也</sup>。飛<sup>コト</sup>翔<sup>去</sup>。燕<sup>亦</sup>欲<sup>巢</sup>。頻<sup>來</sup>語<sup>梁</sup>。如<sup>雌</sup>相<sup>謀</sup>。遂<sup>定</sup>其<sup>所</sup>也。詩<sup>小</sup>雅<sup>瞻</sup>鳥<sup>愛</sup>止<sup>于</sup>誰<sup>之</sup>屋<sup>古</sup>樂<sup>府</sup>。鳥<sup>生</sup>三<sup>八</sup>九<sup>子</sup>。上<sup>句</sup>暗<sup>合</sup>用<sup>ス</sup>。淮南<sup>子</sup>大<sup>成</sup>成<sup>而</sup>燕<sup>雀</sup>賀<sup>喜</sup>。下<sup>句</sup>暗<sup>用</sup>其<sup>事</sup>。而<sup>換</sup>骨<sup>脫</sup>胎<sup>論</sup>語<sup>翔</sup>。而<sup>後</sup>集<sup>亦</sup>暗<sup>合</sup>用<sup>其</sup>意<sup>竝</sup>運<sup>用</sup>融<sup>化</sup>。渾<sup>然</sup>無<sup>痕</sup>。妙<sup>入</sup>化<sup>境</sup>。西<sup>清</sup>詩<sup>話</sup>云<sup>作</sup>詩<sup>用</sup>事<sup>要</sup>如<sup>水</sup>中<sup>著</sup>鹽<sup>飲</sup>水<sup>乃</sup>知<sup>鹽</sup>味<sup>是</sup>也。暫<sup>止</sup>二<sup>字</sup>拈<sup>出</sup>不<sup>久</sup>居<sup>之</sup>意<sup>將</sup>數<sup>子</sup>亦<sup>喻</sup>率<sup>家</sup>累<sup>頻</sup>來<sup>定</sup>巢<sup>有</sup>似<sup>卜</sup>居<sup>之</sup>不<sup>率</sup>易<sup>皆</sup>因<sup>物</sup>寓<sup>意</sup>感<sup>二</sup>己<sup>之</sup>境<sup>界</sup>與<sup>之</sup>相<sup>類</sup>也。暫<sup>止</sup>與<sup>頻</sup>來<sup>有</sup>開<sup>合</sup>對<sup>法</sup>尤<sup>妙</sup>。

(注19) 『唐詩實珠』に見える。

(注20) 『詩經』小雅・正月。

(注21) 宋・郭茂倩『樂府詩集』卷二十八、相和歌辭三、「鳥生」に見える。輯註及び顧宸「註解」に古樂府「鳥八九子を生む、端坐す秦氏桂樹の間」として挙げ、宇都宮逸庵の増広本には「註解」を引く。

(注22) 『淮南子』説山訓。訳注稿(三)、008「賈至舍人早に大明宮に朝すに奉和す詩、(注8)参照。

(注23) もとは道家の語。外見はそのまに中味をそっくりいれかえること。そこから、古人の表現をふまえ、それをすつかり斬新なものに作り変えることをいい、創作論として北宋の黃庭堅(山谷)が提唱した。釈惠洪(一〇七一一二八)の『冷齋詩話』巻一に「山谷云ふ、詩意は窮まり無く、而して人の才は限り有り。限り有るの才を以て、窮まり無きの意を追ふ、淵明・少陵と雖も、工を得ざるなり。然れども其の意を易へずして其の語を造る、之を換骨法と謂ふ。其の意を規模し、之を形容す、之を奪胎法と謂ふ」と。

(注24) 『論語』鄉党篇に「色斯に挙がり、翔けて後に集まる」とあり、朱子の集註に「言ふころは、鳥、人の顔色善からざるを見て、則ち飛び去る。回翔し審らかに視て後に下る」と。

(注25) もとは仏教語。靈妙で及びがたい境界をいう。例えば、清・王士禛(号は漁洋山人。一六三四〜一七一)の「香祖筆記」巻八に「筏を捨て岸に登る、禪家以て悟境と為し、詩家以て化境と為す。詩禪一致、等しく差別無し」と。

(注26) 北宋・蔡條(字は約之。一一二六)撰。この箇所、北宋・胡仔『茗溪漁隱叢話』前集卷十および南宋・魏慶之『詩人玉屑』巻七、用事に引く。  
(注27) 顧宸「註解」に「敵顯亭曰く、久居せざるの意を拈出して、最も醒たり最も確たり。へ飛鳥」に「暫止」と曰ひ、「語燕」に「頻來」と曰ふ。隠然として三面枝無しの感有り、且つ色斯に挙がり、翔けて後に集まる、鳥猶ほ此の如し。而して況んや人をや。乃ち知る少陵、字軽く下さざるを」という。宇都宮逸庵の増広本にも引く。ちなみに、敵顯亭は、敵汎(字は子餐。一六一七〜一六七八)のこと。浙江餘杭の人で、順治十二年(一六五五)の進士。著に『臯園詩文集』四巻があるという。〈三面枝無し〉は、魏・曹操「短歌行」(『文選』巻二十七)の「月明らかに星稀にして、鳥鵲

南に飛ぶ。樹を繞ること三匝、枝の依る可き無しに基づき、依託するところなきをいう。

〔注28〕『唐詩貫珠』に見える。開合については、前出023の（注6）参照。

〈将〉は、率である。〈鳥〉が〈数子〉を〈将〉い、雛に飛ぶことを習わせるのである。〈語燕〉は、雌雄が仲よく鳴き交わすのを言う。新しい〈堂〉がようやく〈成〉り、〈茆〉を葺くのがやっとおわたた。〈鳥〉は雛を〈将〉いてやって来て、〈暫し〉屋上に〈止〉まって、はばたく練習をさせて翔び去っていった。〈燕〉も〈巢〉を作ろうとして、ひっきりなしにやってきて、梁の間に鳴いている。まるで雌雄で相談しているみたいで、かくしてその場所を決めたのである。

『詩経』の小雅に「鳥の爰に止まるを瞻るに、誰の屋に于いてす」、古楽府に「鳥八九子を生む」とあり、上の句は暗にこれを合わせ用いている。『淮南子』に「大厦成つて燕雀賀す」とあり、下の句は暗にこの故事を用いて換骨脱胎している。『論語』の「翔けて後に集まる」も、やはり暗にその意を合わせ用いている。いずれもその用い方はうまく融合し、渾然一体となって斧鑿の痕がなく、絶妙のものとなっている。『西清詩話』に「詩を作る場合、水の中に塩を入れるようにしなければならぬ。見た目ではわからないが、飲んでみてやると塩味だとわかる」というのが、そうである。〈暫止〉の二字は、長居をしないという意を言い出している。〈数子を将ふ〉というのも、やはり家族を引き連れているのに喩える。〈頻りに来る〉〈巢を定む〉のは、〈居を卜す〉のが容易でないと似たところがある。いずれも物によって意を寓し、己れの境遇がこれと類似しているのに心感じたのである。〈暫止〉と〈頻来〉とは開合があり、対句の作り方がとりわけ絶妙だ。

傍人錯<sup>リテ</sup>比<sup>ス</sup>揚雄<sup>カ</sup>宅 懶惰<sup>無<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>作<sup>ル</sup></sup>解嘲<sup>一</sup>

※錯…トリチガヘテ 懶惰…ブシヤウ

揚雄ハ蜀人。因<sup>テ</sup>其地<sup>ニ</sup>用<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。漢書本傳<sup>（注29）</sup>雄有<sup>二</sup>田一<sup>一</sup>廛宅一<sup>一</sup>區<sup>一</sup>。世

く以<sup>テ</sup>農桑<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>業<sup>ト</sup>。嘗<sup>テ</sup>草<sup>ニ</sup>大玄<sup>ヲ</sup>、有<sup>テ</sup>守<sup>リ</sup>泊<sup>ル</sup>如<sup>ク</sup>。或<sup>ヒト</sup>嘲<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>玄尙<sup>白</sup>、雄作<sup>二</sup>解嘲<sup>一</sup>文<sup>ヲ</sup>。此<sup>（注30）</sup>翻案<sup>シテ</sup>不<sup>シテ</sup>曰<sup>ク</sup>欲<sup>スト</sup>作<sup>ニ</sup>解嘲<sup>一</sup>、而<sup>曰</sup>無<sup>レ</sup>心<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>、謙<sup>シテ</sup>託<sup>シテ</sup>懶惰<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>欲<sup>セ</sup>争<sup>コト</sup>也。蓋<sup>シテ</sup>公在<sup>テ</sup>蜀<sup>ニ</sup>營<sup>ニ</sup>一區<sup>一</sup>、人或<sup>ハ</sup>比<sup>シ</sup>揚雄<sup>カ</sup>村居<sup>ニ</sup>、則<sup>チ</sup>錯<sup>リ</sup>認<sup>ル</sup>耳。雄<sup>ハ</sup>能<sup>テ</sup>作<sup>テ</sup>文<sup>ヲ</sup>解嘲<sup>一</sup>、我<sup>ハ</sup>乃<sup>チ</sup>懶惰<sup>ニ</sup>能<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>、彼<sup>カ</sup>、徒<sup>ニ</sup>任<sup>シ</sup>人<sup>ノ</sup>呼<sup>レ</sup>牛<sup>ト</sup>呼<sup>レ</sup>馬<sup>ト</sup>而已<sup>ニ</sup>。公嘗<sup>テ</sup>懷<sup>ク</sup>稷契<sup>之</sup>志<sup>ヲ</sup>、而今<sup>ニ</sup>徒<sup>ニ</sup>爲<sup>ル</sup>田<sup>ノ</sup>夫<sup>ノ</sup>野<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>、是<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>實<sup>ニ</sup>、自<sup>ラ</sup>嘲<sup>ル</sup>也。懶音<sup>（注33）</sup>懶<sup>一</sup>、嘲<sup>（注34）</sup>陟交<sup>反</sup>。惰<sup>ニ</sup>作<sup>レ</sup>慢<sup>一</sup>。

〔注29〕『漢書』卷八十七上。なお、「解嘲」は「文選」卷四十五にも収む。〈大〉は〈大〉の訛字。

〔注30〕『唐詩貫珠』に「結は是れ翻案。解嘲を作らんと欲すと曰はずして作るに心無しと曰ふ、其れ高く人の頭地を超出す」と。

〔注31〕『莊子』天道篇に「我を牛と呼べば、之を牛と謂はん、我を馬と呼べば、之を馬と謂はん」と。

〔注32〕訳注稿(四)、011「省中の院壁に題す」詩の詳解に「公平生自ら許すこと甚だ重し、窃に稷契の志を懐く」と。その（注31）参照。

〔注33〕何に基づくか、不明。なお、「字彙」に拠れば、懶は懶と同じ。

〔注34〕例えば、「字彙」に「嘲、陟交の切」と。

〔注35〕〈惰〉字、輯註に〈墮〉に作り、「一に慢に作る」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〈揚雄〉は、蜀の人。その地にちなんでこれを用いる。『漢書』本伝に、「揚雄は、百畝の農地と一区画の住居とがあり、代々農桑に従事していた。かつて「太玄」を草したが、無欲恬淡とした生き方を守っていた。ある人が嘲つて玄だといいながまだ白い（奥義を極めていない）のではないか（だから禄位が得られないのだ）、と言ったのに対し、揚雄は解嘲の文を作った」とある。ここでは翻案して「解嘲を作らんと欲す」といわずに「作るに心無し」という。謙遜して〈懶惰〉にかこつけ言い争いたくないのである。けれど公は蜀の地にあつて一区画の住居を造営したが、人のなかには〈揚雄〉の村居に〈比〉べようとするものがあるのは、〈錯〉つてそう思うのだ。〈楊

雄はうまく文章を作つて「嘲」を「解」いたが、わたしは却つて「懶惰」で、そのようにはできない。他人様が牛と呼べば牛だと思ふし、馬と呼べば馬なのだ。何と言われようとかわまない。公はかつて古代の稷や契のように偉大な天子を補佐したいという志を抱いていたが、今ではそれもかなわず空しく田舎親爺となりはてている。これはその実、自ら嘲つているのである。「懶」、字音は嬾。「嘲」は、陟交の反。「惰」は、一に「慢」に作る。

027 賓至

賓、謂「尊客」。題稱「賓」、詩中曰「再拜」、曰「車馬」、蓋貴人也。

(注1) 錢注(卷十一)及び輯註(卷七)は「有客」に作り、錢注に「草堂本は賓至に作る」と注する。輯註は、宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

「賓」は、尊客のこと。題に「賓」と称し、詩中に「再拜」といい、「車馬」という、けだし身分の尊い御方であろう。

幽栖地僻、經過少。 老病人、扶、再拜難。

公既「出」成都、棲「息」郊村。地僻路隔、少「來過」者。身亦老病、拜跪待「人」、應接艱難、不欲「引」客。閑居寂寥、悠悠銷「日」耳。蓋地僻非「貴客經過之處」、老病又非「迎接」貴客之人。謙詞致「敬」、深「喜」謝也。徐子能云、貴人來往、只在「通都大道」間。公村居僻陋、非「車馬所經之處」。豈意「大賓儼然臨」之、公老身衰病、懶「於接待」、而見「賓客」、必須「要」再拜。一「拜」則必倩「人」扶、一「拜」猶不「易」所、以「再拜」尤難也。按「有客詩」云、思「氣」經「旬」久、臨「江」卜「宅」新。又遣「興」云、衰病那能久。疑「當時」患「痲」腰脚不「自由」、後在「湖南」、半體偏枯。蓋再發也。

(注2) 徐子能「而庵說唐詩」(卷十八)に「貴客來往するは、只だ通都大道の間に在り、那「肯」へて幽栖に到らん。所以に經過する者無し。老病は、我また老病、接待するに懶し。へ人に扶けられて再拜難し」は、客に見ゆ

るに必ず須らく拜せんことを要すべし、拜すれば則ち必ず人を倩うて扶ける。又た只だ好く一拜するも、若し再拜を作さば、即ち人有りて扶くるも、亦た得る能はず。上の句、幽栖、貴客の経る所の処に非ざるを見はす。此の句、老病、又た貴客を迎接するの人に非ざるを見はす」と。通都は、通邑大都の意。また那个は、口語で何人の意。同じく只好も口語で、やむなくの意。

(注3) 「客有り」詩(詳註卷九)に次のように見える。

患氣經旬久 氣を患つて旬を経ること久しく  
臨江卜宅新 江を臨みて宅を卜すること新たなり  
喧卑方避俗 喧卑 方に俗を避け  
疏快頗宜人 疏快 頗る人に宜し  
有客過茅宇 客有り茅宇を過り  
呼兒正葛巾 兒を呼びて葛巾を正さしむ  
自鋤稀菜甲 自ら鋤けば菜甲稀なり  
少摘爲情親 少しく摘むは情親の為なり

「患氣」は、肺疾があるのをいう。

(注4) 「興を遣る」詩(詳註卷九)に次のように見える。

干戈猶未定 干戈猶ほ未だ定まらず  
弟妹各何之 弟妹各おの何くに之く  
拭淚霑襟血 涙を拭へば襟を霑す血  
梳頭滿面絲 頭を梳れば面に滿つる糸  
地卑荒野大 地卑くして荒野大に  
天遠暮江遲 天遠くして暮江遅し  
衰病那能久 衰病那んぞ能く久しからん  
應無見汝期 應に汝を見る期無かるべし

(注5) 訳注稿(一)「杜文貞公伝」に湘南で「舟居痲を病」んでいたことを言い、この「賓至」詩を例に挙げて、「其の患ふこと年有り」と説いている。

その(注95)参照。  
公はすでに成都の市中を出て、郊外の村にひきこもった。「地僻」し路隔たり、わざわざ訪う者も少ない。自らも「老病」の身で、おじぎししたりひざまずいたり挨拶には人の手助けがいる。応対や接待

は困難で、客を招きたいとも思わない。わびずまいはひっそりとして、のんびりと日を過ごすばかりだ。けれど、〈地僻〉で貴客の〈経過〉するような場所ではないし、それに〈老病〉で貴客をお迎えできそうな状態ではない。謙遜の言葉で敬意を表しており、深く喜んで感謝しているのである。徐子能が云う、「尊貴な御方が往来するのは、都大路の間である。公は片田舎に住んでいて、車馬の訪うような場所ではない。りっぱな身分の御方が厳かにおなりになるうとは思ひも寄らぬ。公は年老いた身に病気持ちで、接待するのはおつぐうであるのに、身分の貴い客人に会う場合はどうしても再拜せねばならず、拜礼の時は人に扶けられている。一度の礼拝でさえ容易でないのに、再拜となればとりわけ難儀なわけである」と。按ずるに「客有り」詩に「氣を思つて旬日久しく、江に臨んで宅をトして新たなり」といい、さらに「興を遣る」詩に「衰疾那んぞ能く久しからん」という。どうやら当時、中風を患つていて足腰が思いのままにならなかつたのであろう。後年、湖南で半身不随になつたのは、けれど再発したものであろう。

豈有文章ノ驚海内<sup>一</sup> 謾勞車馬駐江干<sup>二</sup>

※謾勞：ムダニザウサラカケル

言「己非文學ノ大先生<sup>一</sup>、而辱貴客車馬儼然<sup>二</sup>、雖深喜<sup>三</sup>、殷勤<sup>四</sup>、亦自慙愧<sup>上</sup>也。謙退中自命<sup>スルコト</sup>、仍在<sup>（注7）</sup>、氣象可<sup>レ</sup>見。干水涯也。駐江干<sup>二</sup>言不<sup>レ</sup>厭<sup>三</sup>郊居之陋<sup>四</sup>也。

(注6) 光臨の意。『詩経』小雅・白駒に「萑然來思」（萑然として來たる、思は語助字）とあり、朱子の『詩集伝』に「萑然は、光采の貌」という。

(注7) 顧宸『註解』に「韓退之が詩に李杜文章在り、光焰万丈長し」と。公亦た自ら云ふ、人と為り性癖にして佳句に耽る、語人を驚かさずんば死すとも休まず、と。茲に曰く、豈に文章の海内を驚かす有らんや、と。更に一世を震動するの意を見る。僻処と雖も、光焰自ら掩ふ可からず。自ら謙するの中、未だ嘗て自負せずんばあらず。若し竟に謙詞と作さば、便ち老杜の本色に非ず矣」という。〈李杜〉云々は、韓愈（字は退之）の「張籍を

調る」詩。訳注稿(一)、「杜文貞公伝」（注83）参照。〈人と為り性癖〉「僻にして」云々は、042「江上水海勢の如きに値ひ聊か短述す」詩の首聯。

(注8) 薛益「分類」（卷二、尋訪）に「干は、水涯なり」と。

自分は文学の大先生ではないのに、貴客の〈車馬〉のご来臨をかたじけなくした。懇ろな厚情を深く喜んでいるものの、やはり自ら恥じ入っていることを言うのである。それでも謙遜した言い回しのなかに自負の念があり、気概の程がわかる。〈干〉は、水涯である。〈江干に駐まる〉は、郊外の陋屋を厭わぬことを言うのである。

竟日淹留<sup>テ</sup>佳客坐<sup>ス</sup> 百年粗糲腐儒<sup>ノ</sup>餐

※淹留：ユルリトキテ 粗糲：クロゴメ、シ

淹<sup>ハ</sup>久<sup>（注9）</sup>留<sup>（注10）</sup>也。客蓋文雅風流、公與<sup>ニ</sup>語<sup>テ</sup>相樂。故曰<sup>ニ</sup>佳客<sup>一</sup>。百年<sup>ハ</sup>猶<sup>レ</sup>云<sup>（注11）</sup>終身<sup>一</sup>。糲首<sup>（注12）</sup>、又例頼<sup>（注13）</sup>二音。糲米飯也。韓詩外傳<sup>（注14）</sup>曾子糲米之食、未<sup>レ</sup>嘗<sup>テ</sup>飽<sup>一</sup>也。腐儒<sup>ハ</sup>既<sup>レ</sup>見<sup>（注15）</sup>。應<sup>ニ</sup>豈有<sup>ノ</sup>句<sup>一</sup>。此<sup>レ</sup>公自嘆<sup>ス</sup>。腐儒貧窶、粗糲自甘<sup>一</sup>、以終<sup>ニ</sup>百年<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>亦哀<sup>（注16）</sup>乎。蓋佳賓偶<sup>（注17）</sup>至<sup>ル</sup>、亦<sup>レ</sup>供<sup>（注18）</sup>家常便飯<sup>一</sup>耳。故<sup>ニ</sup>慙<sup>（注19）</sup>而謝<sup>（注20）</sup>之<sup>一</sup>。幸<sup>ニ</sup>其人<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>嫌<sup>（注21）</sup>、竟日留<sup>（注22）</sup>款<sup>（注23）</sup>盡<sup>（注24）</sup>歡<sup>（注25）</sup>、所<sup>ニ</sup>以<sup>（注26）</sup>爲<sup>（注27）</sup>佳客<sup>一</sup>也。

(注9) 例えば、「字彙」に「淹は、衣炎の切。音闕。漬なり、久留なり、滯なり」と。

(注10) 顧宸『註解』に「百年は猶ほ終身と云ふがごとし」と。宇都宮遜庵の増広本にも挙げる。

(注11) 輯註に見え、宇都宮遜庵の増広本にもこれを引く。

(注12) 「字彙」に見え、いずれも意味は同じとする。

(注13) 薛益「分類」に見え、宇都宮遜庵の面著に挙げ、そのうち詳説に「分類二糲米ノ飯ト云。糲ハ去<sup>レ</sup>殺<sup>（注14）</sup>未<sup>（注15）</sup>春<sup>（注16）</sup>ヲ云。又米殺雜<sup>（注17）</sup>糲ト云ト字書ニアリ」と。

(注14) 『韓詩外伝』卷二に、子路の語として「曾子は褐衣糲糲、未だ嘗て完からざるなり、糲米の食、未だ嘗て飽かざるなり」と。

(注15) 訳注稿(三)、011「省中の院壁に題す」詩。

(注16) 家庭でのありあわせの食事。『唐詩貫珠』（卷十六、雅事酬贈）に「粗糲の餐は、乃ち家常便飯」と。

〈淹〉は、久しく留まることである。客は、けだし文雅風流の人で、公はともに語らつて楽しんだのであろう。されば「佳客」という。

「百年」は、終身というのとほぼ同じ。「糲」<sup>レ</sup>、字音は稜<sup>レ</sup>、ほかに例<sup>レ</sup>・頼の二音がある。糙米の飯である。「韓詩外伝」に「曾子は糲米の飯さえ、これまで腹一杯食べたことがなかった」とある。「腐儒」は、既出。「豈に有らん」の句に呼応している。これは公が自ら嘆じたのである。「腐儒」たる己れは貧乏このうえなく、「粗糲」に甘んじて、そのまま「百年」を終えるというのだが、なんとも哀しいことではないか。けだしりっぱなお客がたまたま見えても、やはり有り合わせの粗末な食事しか出せないのだ。それゆえ羞じてわびている。さしいわいその御方はこれを厭わず、終日逗留して存分に楽しんでくださった。「佳客」たるゆえんである。

不<sup>レ</sup>嫌<sup>三</sup>野外無<sup>二</sup>供給<sup>一</sup> 乗<sup>レ</sup>興<sup>二</sup>還<sup>テ</sup>來看<sup>三</sup>藥欄<sup>一</sup>

※供給：ゴチソウ 乗興：キガムキタルトキハ 藥欄：ハナバタケ

還<sup>レ</sup>復<sup>レ</sup>也。藥欄<sup>レ</sup>、花藥<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>圍欄<sup>レ</sup>。此<sup>レ</sup>藉<sup>レ</sup>看<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>、望<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>復<sup>レ</sup>來<sup>一</sup>。蓋<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>居<sup>レ</sup>饗<sup>レ</sup>客<sup>一</sup>、咄<sup>レ</sup>嗟<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>辨<sup>一</sup>。野居貧<sup>レ</sup>、殊<sup>レ</sup>乏<sup>レ</sup>供給<sup>一</sup>。客幸<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>嫌<sup>一</sup>、便<sup>レ</sup>須<sup>レ</sup>乘<sup>レ</sup>興<sup>一</sup>復<sup>レ</sup>來<sup>一</sup>。看<sup>レ</sup>庭<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>卉<sup>一</sup>、以<sup>レ</sup>盡<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>歡<sup>一</sup>。聊<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>娛<sup>レ</sup>賓<sup>一</sup>者<sup>一</sup>、只是而已矣。趙紫芝<sup>レ</sup>詩<sup>一</sup>「一餅茶<sup>一</sup>外無<sup>レ</sup>祇待<sup>一</sup>、同<sup>レ</sup>上<sup>三</sup>西樓<sup>一</sup>看<sup>レ</sup>晚山<sup>一</sup>」、李于鱗<sup>レ</sup>詩<sup>一</sup>「不<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>南山<sup>一</sup>色<sup>一</sup>」、貧家一事<sup>一</sup>無<sup>レ</sup>、皆此意也。公ノ詩嘗<sup>レ</sup>云<sup>一</sup>、一飯<sup>一</sup>未<sup>レ</sup>曾<sup>レ</sup>留<sup>レ</sup>俗客<sup>一</sup>、今喜<sup>レ</sup>淹留<sup>一</sup>竟日坐<sup>一</sup>。又望<sup>レ</sup>乘<sup>レ</sup>興<sup>一</sup>還<sup>レ</sup>來<sup>一</sup>、所<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>特<sup>レ</sup>稱<sup>レ</sup>佳客<sup>一</sup>也。通篇以<sup>レ</sup>尋常<sup>一</sup>語<sup>一</sup>、平平<sup>一</sup>寫<sup>レ</sup>來<sup>一</sup>。一氣圓靈<sup>一</sup>、眞<sup>レ</sup>大家<sup>一</sup>數。讀去<sup>レ</sup>似<sup>レ</sup>容易<sup>一</sup>、作<sup>レ</sup>翻<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>難<sup>レ</sup>造<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>境<sup>一</sup>。

(注17) 邵宝「集注」(卷二十三、尋訪類)及び薛益「分類」に「藥欄は、花葉の欄檻なり」と。「分類」は宇都宮遯庵の増広本に、「集注」は詳説にそれぞれ挙げる。花葉といえ、一般に芍薬のことだが、邵傳「集解」に藥欄の下に「花葉の欄なり。専ら芍薬を指さず」と注する。

(注18) 『世説新語』汰侈篇および『晋書』石崇伝に「客の為に豆粥を作り、咄

嗟<sup>ナ</sup>便<sup>ナ</sup>可<sup>ナ</sup>辨<sup>ナ</sup>ず」と。

(注19) 南宋羅大經(字は景綸)の「鶴林玉露」地集卷三、詩犯古人の条に「近時、趙紫芝の詩に云ふ、一瓶の茶外祇待無<sup>レ</sup>、同じく西樓に上つて晚山を見る、と。世以て佳と為す。然れども杜少陵云ふ、嫌<sup>レ</sup>莫<sup>レ</sup>かれ野外供給無<sup>レ</sup>きを、興に乗じて還<sup>レ</sup>來<sup>一</sup>たつて藥欄を看よ、と。即ち此の意なり」と。趙紫芝は、「永嘉の四靈」の一人、趙師秀(号は靈秀。一一七〇〜一二一九)のこと。祇待は、もてなしの意。この記事は度会末茂「杜律評叢」にも挙げる。なお、「鶴林玉露」には、慶安元年(一六四八)刊の和刻本があり、現在、汲古書院刊『和刻本漢籍隨筆集』第八集に影印を収む。

(注20) 明・李于鱗(名は攀龍、号は滄溟。一五一四〜一五七〇)の「冬日」詩

「滄溟先生集」卷十二に、次のように見える。  
客來堪自見 客來たれば自ら見ゆるに堪え  
酒盡且須酌 酒尽すれば且つ須らく酌ふべし  
不是南山色 是れ南山の色ならざれば  
貧家一事無 貧家に一事も無し

(注21) 顧宸「註解」に「遠來公を訪ふ者は定めて俗客に非ず。公の詩に一飯未

だ曾て俗客を留めず、と。今、佳客に遇ふ、則ち淹留して日を竟ふること殊に厭はざるなり」という。宇都宮遯庵の増広本にも引く。なお、ここに挙げる杜甫の詩は、「解悶」十二首其五(詳註卷十七)で、  
李陵蘇武是吾師 李陵蘇武、是れ吾が師  
孟子論文更不疑 孟子の論文、更に疑はず  
一飯未嘗留俗客 一飯未だ嘗て俗客を留めず  
數篇今見古人詩 數篇、今見る古人の詩

とあり、原注に「校書郎孟雲卿」という。孟雲卿のことは、元・辛文房「唐才子伝」卷二に見え、「全唐詩」卷一五七に詩十七首を収める。この詩は、すべて孟雲卿について詠じており、「一飯未だ嘗て俗客を留めず」というのも、杜甫自身のことを言ったものではない。

(注22) 「唐詩貫珠」に「対起して下句更に窮窅、致<sup>ナ</sup>有<sup>ナ</sup>り。三四接し得て自然。四句は一氣圓靈、大家數」と。円靈は、円滑靈妙。

(注23) 「唐詩貫珠」に「少陵此等の詩、最も老練為り。爐を起こし灶「竈」を立つるを用ひず。一味真色、自づから風神膩致有り。塵滓に染まらず、翻つて是れ造り難きの境」とある。風神は、気品。膩致は、きめ細やかな味わ

い。  
 「還」は、復である。「葉欄」は、花畑の囲いの柵。ここでは花をみるのを口実に、もう一度やってくるのを願っている。けだし城市に住んでいれば、客をもてなすのに、咄嗟に弁ずることができようが、田舎暮らしの貧しい台所では、ことのほか「供給」に乏しい。客がさいわい嫌わなければ、ただちに「興に乗じて」再びやって「来て」、庭の花をゆるりと「看」て、主のもてなしを心ゆくまで受けてほしい。とりあえず賓客を心楽しませるのはこれしかないのだ。趙紫芝の詩に「一瓶の茶外祇待無し、同じく西楼に上つて晚山を見る」、李于鱗の詩に「是れ南山の色ならざれば、貧家に一事も無し」とあり、いずれもこの意である。公の詩に「一飯未だ嘗て俗客を留めず」というが、今は「竟日」へ淹留して「坐」しているのを喜び、さらに「興に乗じて」へ「還た来る」のを望んでおり、特に「佳客」と称するゆえんである。一篇全体は、ありふれた言葉で平易に書かれている。一気円霊で、真に大家の作だ。読むと容易な作のようだが、かえって実際は到達しがたい境地である。

028 蜀相

漢丞相諸葛忠武侯廟、在成都府西北二里、昭烈廟西。公參  
 謁懷古、敬識仰止之私。但稱蜀相、非是。說詳于古跡詩注。

(注1) 諸葛亮(字は孔明、一八一〜二三四)のこと。忠武侯は、その諡。「三  
 国志」卷三十五、蜀書五に伝がある。

(注2) 『方輿勝覽』卷五十一、成都府、武侯廟の項に「府城の西北二里に在り」と。錢注(卷十二)に挙げ、輯註(卷七)にこれを引く。宇都宮遷庵の増  
 広本には輯註を引く。

(注3) 昭烈は、劉備(字は玄德、一六一〜二三三)の諡。「三國志」卷三十二、  
 蜀書先主伝。

(注4) 『詩經』小雅・車牽に「高山仰止、景行行止」とあるのに基づく語。止

は、語助字。景は、毛伝は大、鄭箋は明の意に解する。上文の行は、おこ  
 ない。下文の行は、おこなう。朱子の集伝では、景行を大道の意とし、下  
 文の行は、ゆく意に解する。

(注5) 104 「詠懷古跡」五首其四、東陽の詳解に次のように云う。

昭烈を称して蜀主と為すは未だ正しからざるなり。蜀は地の名、国号に  
 非ざるなり。昭烈、漢を以て名のる、未だ嘗て蜀を以て名のらざるなり。  
 主は君に次ぐの称。本と古、卿大夫を称して主と為るに防まる、亦た之  
 を貶するなり。顧炎武日知録に云ふ、陳寿三國志を作り、先主後主の名  
 を創立す。晋、魏の統を受け、義、両帝無きを以てなり。今千載の後、  
 曹氏司馬氏の臣に非ずして、猶ほ此の称に沿ふは、殊に当らずと為す。  
 沉んや漢を改めて蜀と為す、亦た寿が筆に出づ。当時魏既に漢を篡し昭  
 烈を改称して蜀と為し、漢の統に附することを得ざらしむ。異代の文人  
 史家阿枉の故を察せず、杜甫詩中の若きも、便ち蜀主と称す。殊に人を  
 知り世を論ずるの字に非ざるなり。朱子綱目亦た帝禅を書して後主と  
 為す。姚燧深く以て非と為す。元史の伝に見ゆ。諸葛孔明の書中、先主  
 と称する者有るは、本と当に是れ先帝なるべし。亦た魏晋の人改めて先  
 主と為す耳。と。此れ千古の格論なり。苟も名義の正しからざるは、学  
 者宜しく辨明すべき所、惜しむらくは公亦た世俗の慣呼する所に習い  
 て、未だ之を深く考へざるなり。

漢の丞相諸葛忠武侯の廟は、成都府の西北二里、昭烈廟の西にある。  
 公は參詣拜謁して古を懐い、つつしんで敬仰の私心をしるした。た  
 だ、「蜀相」と称するのは、よくない。そのことについての説は、「古  
 跡」詩の注に詳しい。

丞相祠堂何處尋 錦官城外柏森森

※柏：ヒノキ

錦官城、原浣花村之地。官家織錦之處、故名。如銅官鹽官  
 之類。後世遂通為成都府城名。今公所言即指浣花里。  
 水經註成都萬里橋南岸道西有城、故錦官也。明一統志錦官  
 城在萬里橋南。因其有二錦官故名。猶合浦之珠官也。潘  
 岳懷舊賦「柏森森」以攢植、森森、林木秀聳之貌。武侯廟前有

二大柏一圍數丈、乃其所手植<sup>(注10)</sup>。至<sup>レ</sup>唐<sup>ニ</sup>歷<sup>コト</sup>年<sup>ヲ</sup>五百餘歲、蜀人敬愛比<sup>ニ</sup>孔廟之楹<sup>一</sup>。公<sup>ノ</sup>古柏行<sup>ニ</sup>云、孔明廟前有<sup>ニ</sup>古柏<sup>一</sup>、柯<sup>ハ</sup>如<sup>ニ</sup>青銅<sup>ノ</sup>根<sup>ハ</sup>如<sup>ニ</sup>石<sup>ノ</sup>。霜皮溜<sup>レ</sup>雨<sup>ヲ</sup>四十圍、黛色參<sup>ハ</sup>天<sup>ニ</sup>二千尺。君臣已<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>時際會<sup>ス</sup>、樹木猶爲<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>愛惜<sup>セラル</sup>。雲來<sup>ハ</sup>氣<sup>ハ</sup>接<sup>テ</sup>巫峽<sup>ニ</sup>長、月出<sup>ハ</sup>寒<sup>ニ</sup>通<sup>ニ</sup>雪山<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>。蓋<sup>ニ</sup>其高大巍聳<sup>、所謂喬木如<sup>レ</sup>山也。故<sup>ニ</sup>起頭特<sup>ニ</sup>舉<sup>ニ</sup>其所<sup>一</sup>觸<sup>レ</sup>目<sup>一</sup>。言欲<sup>レ</sup>謁<sup>ニ</sup>丞相之祠<sup>ニ</sup>、而未<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、出<sup>テ</sup>浣花里<sup>ヲ</sup>西<sup>ニ</sup>望<sup>ハ</sup>、則看<sup>ニ</sup>大柏之森森<sup>一</sup>、無<sup>レ</sup>復煩<sup>レ</sup>問<sup>コト</sup>于人<sup>ニ</sup>、此乃係<sup>ニ</sup>其手植<sup>ニ</sup>、便先遙<sup>ニ</sup>望<sup>ニ</sup>而恭<sup>ニ</sup>敬<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>也。</sup>

(注6) 『集千家註』(卷七)に引く孫季昭の説に「趙云ふ、或いは其の錦官有るを以てなり。銅官塩官の如し」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。孫季昭は、南宋・孫奕(字は季昭、号は履齋)のこと。その『履齋示兒篇』卷十、詩説、錦官城の条に見える。なお、地名としての塩官が登場するのは漢代、西河郡に塩官が置かれていた(『漢書』地理志下)のがその早い例である。また銅官については、杜甫に「銅官渚に風を守る」と題する詩(評註卷二十二)があり、そこに見える銅官渚(今の湖南省長沙市の西北)が挙げられよう。

(注7) 『水経注』卷三十三、江水の条に「大城の南門を江橋と曰ふ。橋南を万里橋と曰ふ。西上を夷星橋と曰ふ。下を笮橋と曰ふ。南岸道東に文字有り。(中略)学、夷星橋の南岸道東に移る。道西の城、故の錦官なり。言ふところは錦工錦を織れば、則ち之を江流に濯ふ。而して錦鮮明に至る。濯ふに他の江を以てすれば、則ち錦色弱し矣。遂に之に命づけて錦里と為すなり」と。輯註に挙げ、宇都宮遷庵の増広本に引く。

(注8) 『大明一統志』卷六十七、成都府の条。宇都宮遷庵の増広本に挙げる。珠官は、もと真珠を採取する役所。三国・呉の時、同名の郡が置かれた。合浦は、今の広西省合浦県の東北。

(注9) 西晋・潘岳「懐旧の賦」(『文選』卷十六)に「墳累として以て隴に接せり、柏森森として以て攢植す」と。潘岳、字は安仁(二四七〜三〇〇)。「晋書」卷五十五に伝があり、興膳宏編『六朝詩人傳』に訳注がある(齋藤稀史執筆)。ちなみに、李善注に「仲長子昌言に曰く、古の萊、松柏梧桐を植えて以て其の墳に識す」と。なお、寛文版では柏字にカエと訓を施す。「懐旧の賦」は、輯註に挙げる。宇都宮遷庵の増広本には輯註を

詳説には『会粹』(巻八)に挙げるのを引く。

(注10) 顧宸「註解」に「儒林広義に曰く、成都先主の廟側に諸葛武侯の祠有り。祠の前に大柏有り。孔明の手植に係る。圍數十丈」云々という。「儒林広義」は、北宋・田況の撰。「註解」は、宇都宮遷庵の両著にも挙げる。

(注11) 孔廟の楹については、明・謝肇淛「五雜俎」卷十、物部二に「孔廟の中の楹、周秦漢晋を歴て数千年、懐帝の永嘉三年に至って枯る。枯れて三百有九年、子孫之を守つて敢へて動かさず、隋の恭帝義寧元年復た生ず」云々という記事があり、寺島良安「和漢三才図会」の楹の条にも引く。

(注12) 評註卷十五、大暦元年(永泰二年十一月改元、七六六)、夔州での作。その冒頭八句。但し第一句目、「古柏」を「老柏」に作る。

(注13) 『唐詩貫珠』(卷四十五、古迹)に「蓋し樹は高大巍聳、濃映陰森たり」と。

(注14) 『広群芳譜』卷七十一、木譜四、柏の条に、「蜀都雜抄」の「蜀都大抵雨多く風少なし。故に竹樹皆修く聳ゆ。少陵の古柏二千尺、人其の瘦長を識る。詩に固より放言有るも、之を要するに蜀産、他と廻かに異なる。柏の森森と謂ふ者は、惟だ蜀のみ然りと為す。所謂喬木山の如き者、亦た惟だ蜀のみ然りと為す」と。南宋・范成大(字は至能、号は石湖居士。一一二六〜一一九三)の「晩に宜華の旧苑を歩む」詩(『石湖居士詩集』卷十七)の起句に「喬木山の如し麋苑の西」と見える。宜華苑は、蜀の後主が建てた宮苑。

(注15) 『唐詩貫珠』に「二、祠に天に参はる古柏有るに因つて、所以に特に其の目に触るる者を挙ぐ。言ふところは丞相の祠を尋ねんと欲し、止だ看る森森たる古柏の処、便ち是れなるを」と。

〈錦官城〉は、もと浣花村の地。官衙で錦を織っていた場所であることから、名がついた。銅官・塩官の類である。後世、そのまま通用して成都府城の名称となった。今ここで公が言うのは、ほかならぬ浣花溪を指す。『水経注』に「成都万里橋南岸の道西に城あり、故の錦官である」と。明一統志に「錦官城は万里橋の南にある。そこに錦官が置かれたのに因んで名づけられた。合浦の珠官と同様である」と。潘岳の「懐旧の賦」に「柏森森として以て攢植す」とあり、森森は、林の木々が高くそびえているさま。武侯の廟前に大

きな「柏」があり、幹まわりは数丈、これぞ武侯が手ずから植えたものである。唐の時代まで五百餘歳を経ており、蜀の人々は敬愛して、孔子廟の楹に比している。公の「古柏行」に云う、「孔明廟前古柏有り、柯は青銅の如く根は石の如し。霜皮雨を溜る四十圍、黛色天に參ず二千尺。君臣已に時と際会す、樹木猶ほ人の為に愛惜せらる。雲来たりて気は巫峽と接して長し、月出でて寒は雪山に通じて白し」と。けだし、その高大でそびえたつありさまは、いわゆる「喬木山の如し」というようなものであつたらう。されば冒頭、目に触れたものを特にとりあげているのである。ここで言う意味は、「丞相」の「祠」に拝謁しようと思ひながら、どこへゆけばよいのか場所を知らずにいた。浣花里を出て西のかたを望むと、大きな「柏」が「森森」と茂っているのが見えた。もはや人に尋ねるまでもない。これぞ「丞相」が手ずから植えられたものなのだ。さつそく遙か拝して敬慕の念を捧げた、ということである。

映階碧草自春色 隔葉黃鸝空好音

此方造廟庭、記其所見聞。階承堂葉、承柏、階前、春草、萋凝碧色、林間、黃鸝、載好其音。自字寂寞、意空、字有使誰聽之恨、竝嘆其無情、不勝感憤也。蓋特來瞻拜、平昔所欽慕、有親見之思、而廟庭寂寥、容不可見、所以感物惆悵也。

〔注16〕「階」字、錢注及び輯註は「階」に作る。音義同じ。

〔注17〕『唐詩實珠』に「言ふところは陰階前に映じ、草碧色を為り。鶯鶯葉に棲み、載ち其の音を好くす。自の字寂寞の意。空字好字に与いて更に深し」と。「載ち其の音を好くす」は、『詩経』「邠風・凱風の「睨睨たる黄鳥、載ち其の音を好くす」とあるのに拠る。睨睨は、双声の語で、毛伝に「好き貌」、朱子の集伝に「清和円転の意」。

〔注18〕邵傳『集解』に「祠に入るの感なり。草自づから春色、鳥空しく好音。侯の音容聞見することを得ず矣」と。

これはちょうど廟庭にいたつて、その見たり聞いたりしたことを記

している。「階」は「堂」を承け、「葉」は「柏」を承け、「階」前の「春草」は、さかんに「碧」色を「凝」らし、林間の「黄鸝」は、その「音」を「好」くしている。「自」の字には寂寞の意が、「空」の字には誰に聴かせようとするのか、誰も聴く者はいないのでいう恨みの気持ちが込められている。ともにその無情なるを嘆じ、感傷にたえないのである。けだし、わざわざやってきて仰ぎ拝するのは、平生欽慕しているものを、実際自分の目で見るといふ思いがあるのだが、されど廟庭は寂寥として、武侯の音容は見ることができない。物に感じて悲しむゆえである。

三顧頻繁、天下計 兩朝開濟、老臣心

出師表、先帝不レシテ以ニ臣カ卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、問臣以ニ當世之事。頻繁、屢也。蜀志費禕傳、以奉詔使稱旨、頻繁至、吳。晉書刑法志、詔旨使、問頻繁。山濤傳、手詔頻繁。文選庾亮讓中書令表、頻繁省闕。陸雲、夏府君誄、頻繁幃。答兄平原書、錫命、命頻繁。是當時語、皆有殷勤意。唯費禕山濤二傳作煩。蓋後人減筆書爾。天下計、言下恢復

天下之計、即在草廬所問答。語、在本傳、是也。兩朝、謂先主後主。開濟、謂開基濟業。晉書桓宣傳、開濟素、又劉琨傳、琨忠良開濟。蜀志本傳、先主疾篤、召亮、亮囑曰、君才十倍曹丕、必能定大事。若嗣子可輔、則輔之、不然君可自取。亮泣曰、臣敢不竭股肱之力、效忠貞之節、繼之以死。老臣心正指此也。二句言君臣際會。先主三顧孔明於草廬、而不レ憚頻繁之勞者、為討滅逆賊、恢復天下之計。孔明受恩感激、奉事先後兩主、以天下為己任、欲以開基濟業、而報其殊遇。即出師表所云、先帝臨崩、寄臣以大事、臣受命以來、夙夜憂歎。恐託付不效、以傷先帝之明。今當效死、以報先帝之

定中原上。庶竭駑鈍、攘除姦凶、興復漢室、還于舊

都<sup>ニ</sup>、此臣<sup>カ</sup>之所<sup>下</sup>以報<sup>テ</sup>先帝<sup>ニ</sup>、而忠<sup>スル</sup>陛下<sup>ニ</sup>之職分也。嗚呼、天若  
 祚<sup>シテ</sup>漢<sup>ニ</sup>、使<sup>ハ</sup>斯人<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>死<sup>セ</sup>、則平<sup>レ</sup>賊<sup>ヲ</sup>撥<sup>テ</sup>亂<sup>ヲ</sup>、興<sup>セ</sup>隆<sup>ヲ</sup>漢室<sup>也</sup>。  
 一、必<sup>ス</sup>矣。結句所<sup>ニ</sup>以痛歎<sup>スル</sup>也。

〔注19〕『三國志』諸葛亮伝および『文選』卷三十七。また『古文真宝』後集にも収む。

〔注20〕『三國志』卷三十七、蜀書十四。顧宸「註解」に挙げる。

〔注21〕『晋書』卷三十。

〔注22〕『晋書』卷四十三。

〔注23〕『文選』卷三十八。輯註や顧宸「註解」に挙げ、輯註は、宇都宮遯庵の増広本に引く。ちなみに、庾亮、字は元規(二八九〜三四〇)。「晋書」卷七十三に伝がある。

〔注24〕陸雲(字は士龍、二六二〜三〇三)の「晋の故の予章内史夏府君の誄」(明・張溥編『漢魏六朝百三名家集』所収『陸清河集』卷一)。伝は『晋書』卷五十四に見え、『六朝詩人傳』に訳注がある(木津祐子執筆)。

〔注25〕『陸清河集』卷二。平原は、陸雲の兄、陸機(字は士衡、二六一〜三〇三)のこと。伝は『晋書』卷五十四に見え、『六朝詩人傳』に訳注がある(木津祐子執筆)。

〔注26〕『晋書』卷八十一。輯註や顧宸「註解」に挙げ、輯註は、宇都宮遯庵の増広本に引く。

〔注27〕『晋書』卷六十二。顧宸「註解」に挙げる。劉琨、字は越石(二七一〜三一八)、その伝は『六朝詩人傳』に訳注がある(湯淺陽子執筆)。

〔注28〕邵傳『集解』に「侯、既に先主に事へ、又た後主に事ふ。兩朝開濟、天下を以て己が任と為す。其の言に曰く、股肱の力を竭くし、忠貞の節を效して、之を継ぐに死を以てせんと、真に老臣の心なり」と。

〔注29〕〈英〉は、獎の訛字。

「出師の表」に「先帝、臣が卑鄙を以てせずして、猥りに自ら枉屈して、三たび臣を草廬に顧み、臣に問ふに当世の事を以てす」と。

〈頻繁〉は、屢である。『蜀志』費禕伝に「使を奉じて旨に称ふを以て頻繁に呉に至る」、『晋書』刑法志に「詔旨問はしむること頻繁」、山濤伝に「手詔頻繁」、『文選』の庾亮「中書令を讓る表」に「省闈に頻繁」、陸雲の「夏府君誄」に「幃幄に頻繁」、兄平原に答ふる書に

に「命を錫ふこと頻繁」とあり、当時習見の語で、いずれも殷勤の意がある。ただ費禕・山濤の二伝では、煩に作る。けだし後人が筆を減じて省略して書いたのであろう。〈天下の計〉は、〈天下〉を恢復する〈計〉を言う。即ち草廬で問答した内容で、語は本伝にみえるのが、そうである。〈兩朝〉は、先主と後主とのこと。〈開濟〉は、基を〈開〉き業を〈濟〉すこと。『晋書』桓宣伝に「開濟素より篤し」、また劉琨伝に「琨、忠良にして開濟す」と。『蜀志』本伝に「先主疾篤し。亮を召して囑して曰く、君が才、曹丕に十倍す。必ず能く大事を定めん。若し嗣子輔く可くんば則ち輔けよ、然らずんば君自ら取る可し。亮泣きて曰く、臣敢へて股肱の力を竭くし、忠貞の節を致して、之に継ぐに死を以てせざらんや」と。〈老臣の心〉は、まさにこれを指すのである。この二句は、君臣の際会を言う。先主が孔明を草廬に〈三顧〉し、〈頻繁〉の労を憚らなかつたのは、逆賊を討滅し〈天下〉を恢復する〈計〉のためであった。孔明は恩を受けて感激し、先後兩主につかえ、天下平定を己が任とし、基を〈開〉き業を〈濟〉して、その殊遇に報いんとした。即ち「出師表」に云う「先帝崩ずるに臨んで臣に寄するに大事を以てす。臣命を受けて以來、夙夜憂歎す。託付效あらず、以て先帝の明を傷らんを恐る。今當に三軍を奨帥し、北、中原を定むべし。庶はくは驚鈍を竭くし、姦凶を攘除し、漢室を興復して、旧都に還らん、此れ臣が先帝に報じ、而して陛下に忠する所以の職分なり」である。ああ、天がもし漢に福を授けて命脈を承らえさせ、この人を死なせずいたら、賊をたいらげ乱をおさめて、漢室を興隆させることは必定であつたらうに。結句で痛歎するゆえんである。

出師未<sup>レ</sup>捷身先死<sup>ス</sup> 長<sup>ク</sup>使<sup>ニ</sup>英雄<sup>一</sup> 淚滿<sup>レ</sup>襟<sup>ニ</sup>

出如<sup>注30</sup>字<sup>ノ</sup>、不<sup>レ</sup>必<sup>シ</sup>讀<sup>ム</sup>去聲<sup>ニ</sup>。本傳<sup>ニ</sup>、亮悉<sup>シテ</sup>大衆<sup>ヲ</sup>由<sup>リ</sup>斜谷<sup>ヲ</sup>出<sup>テ</sup>、據<sup>リ</sup>武功<sup>、</sup>五丈原<sup>、</sup>與<sup>二</sup>司馬懿<sup>一</sup>對<sup>ニ</sup>壘<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>渭南<sup>ニ</sup>。相持<sup>スル</sup>百餘日、以

疾<sup>レ</sup>卒<sup>ニ</sup>于<sup>レ</sup>軍<sup>ニ</sup>。未<sup>レ</sup>字<sup>先</sup>字、無<sup>レ</sup>限<sup>遺</sup>恨。淚<sup>滿</sup>襟<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>勝<sup>二</sup>慷慨<sup>一</sup>也。武<sup>侯</sup>上<sup>テ</sup>出<sup>師</sup>表<sup>ヲ</sup>大<sup>舉</sup>討<sup>テ</sup>魏<sup>ヲ</sup>、司<sup>馬</sup>懿<sup>畏</sup>侯<sup>ヲ</sup>如<sup>レ</sup>虎<sup>ノ</sup>、恢<sup>復</sup>之<sup>形</sup>宛<sup>然</sup>在<sup>レ</sup>目<sup>ニ</sup>。奈<sup>何</sup>師<sup>未</sup>捷<sup>而</sup>身<sup>先</sup>死<sup>シ</sup>、侯<sup>之</sup>忠<sup>誠</sup>而<sup>功</sup>業<sup>不</sup>就<sup>、</sup>使<sup>萬</sup>世<sup>英</sup>雄<sup>之</sup>輩<sup>皆</sup>爲<sup>レ</sup>之<sup>痛</sup>歎<sup>不</sup>能<sup>二</sup>自<sup>己</sup>一<sup>也</sup>。宋<sup>ノ</sup>宗<sup>忠</sup>簡<sup>臨</sup>終<sup>誦</sup>此<sup>二</sup>語<sup>ヲ</sup>、亦<sup>可</sup>悲<sup>哉</sup>。

(注30) 字の如しとは、一字に複数の字音がある場合、その本来の字音に従うことをいう。出師は、ふつうスインと訓ずる。例えば、林羅山原解「鶴洞石齋増述」古文真宝後集「解大成」に「出師表」を収め、「出、去声。韻会ニ凡<sup>ツ</sup>物自出<sup>レ</sup>ハ則<sup>チ</sup>入<sup>声</sup>。音<sup>シ</sup>ゆつ訓いづる、使<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>出<sup>サ</sup>則<sup>チ</sup>去<sup>声</sup>、音<sup>ス</sup>い訓いだす」と注する。韻会は「古今韻会舉要」のこと。

(注31) 邵<sup>傳</sup>「集解」に「大衆を悉くして斜谷を出で、司馬懿と渭南に壘を對するに及び、懿、侯を畏ること虎の如く、恢復の形、宛然として目に在り。相持すること百餘日、軍に卒す。毎に天下後世の英雄をして之を泣き自ら已むこと能はざらしむ。何ぞ復た漢の忠誠にして功業就らざるや。一字一涙」と。

(注32) 沈<sup>德</sup>潛「杜詩偶評」(卷四)に「宗忠簡終はりに臨んで此の二語を誦す」と。宗忠簡は、宋・宗<sup>沢</sup>字は汝霖、一〇五九〜一一二八)のこと。忠簡は諡。義烏(浙江省)の人。元祐六年(一〇九一)の進士。当時、北方から圧迫を強めていた金に対して主戦論を主張し、岳飛(一一〇三〜一一四二)の才を見出した。宋室南渡の後、開封を守って力戦したが、建炎二年その地に歿した。『宗忠簡公集』八巻がある。『宋史』卷三六〇、宗沢伝に「沢、前後上に京に還らんことを請ふこと二十餘奏、毎に潛善等の抑する所と為り、憂憤疾を成し、疽背に発す。諸將入りて疾を問ふに、沢矍然として曰く、吾れ二帝蒙塵せるを以て、積憤して此に至る。汝等能く敵を殲さば、則ち我死すとも恨み無し」と。衆流涕して曰く、敢へて力を尽くさざらんや、と。諸將出づ。沢歎じて曰く、出師未だ捷たずして身先づ死す、長く英雄をして涙襟に滿たしむ、と。翌日、風雨昼晦し。沢、一語も家事に及ぶ無く、但だ河を過ぎよと連呼する者三たびにして薨す」と。潛善は、黃<sup>潛</sup>善(字は茂和、一一二九)。『宋史』卷四七三、姦臣伝三に伝がある。二帝は、徽宗および欽宗。靖康の変(一一二七)で、金に拉致された。欽宗の弟、康王は南に逃れ即位して臨安(杭州)に都した。

〈出〉は、文字どおりで、必ずしも去声に読まない。本伝に「亮、大衆を悉して斜谷より出で、武功の五丈原に拠り、司馬懿と渭南に對壘す。相持すること百餘日、疾を以て軍中に卒す」と。〈未〉の字〈先〉の字に限りなき遺恨が込められている。〈涙襟に滿つ〉は、慷慨にたえぬのである。武侯は「出師の表」を奉つて、大挙して魏を討つことにしたが、司馬懿は侯を畏れること虎のごとくであり、恢復の形勢は、さながら目前にあつた。いかんせん〈師〉が〈未だ捷たず〉して〈身先づ死〉し、侯の真心は誠実そのものでありながら功業は成就せず、万世〈英雄〉の輩に痛嘆してやまずにはおられぬようにさせたのである。宋の宗忠簡は臨終の際にこの二句を誦したが、やはり悲しむべきことである。

529 狂夫

感慨自遣<sup>ル</sup>之作。盧元昌<sup>注</sup>云、因<sup>テ</sup>草堂<sup>ニ</sup>而興<sup>レ</sup>感<sup>ヲ</sup>。詩成之後、用<sup>テ</sup>末句<sup>ノ</sup>狂夫<sup>ヲ</sup>爲<sup>レ</sup>題<sup>ト</sup>。非<sup>レ</sup>咏<sup>スル</sup>狂夫<sup>一</sup>也。

(注1) 『唐宋詩醇』(卷五)に挙げる。盧元昌、字は文子、号は半林居士。江蘇華亭(今の上海市)の人。伝は『国朝詩人微略』初編卷五に見える。康熙二十五年(一六八六)刊の『杜詩闡』三十三卷(現在、台湾大通書局刊『杜詩叢刊』)に影印を収むがあり、その卷十一にこの詩を載せるが、それには見えない。なお、仇兆鰲の詳註(卷九)に、盧注として「此の詩、草堂に因つて感を興す。詩成るの後、末句の狂夫を用ひて題と為す」と。

自らの感慨を吐露して気晴らしをした作。盧元昌が云う、「草堂にちなんで感慨をおこした。詩ができてから、末句の〈狂夫〉を用いて題とした」と。狂夫を詠じたものではない。

萬里橋西一草堂 百花潭水即滄浪

※即：スグサマ

地<sup>ハ</sup>接<sup>ス</sup>萬里橋<sup>ニ</sup>、名亦壯<sup>ナリ</sup>矣。而<sup>公</sup>磨<sup>一</sup>一草堂、僅<sup>ニ</sup>容<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>寓<sup>ス</sup>止<sup>ニ</sup>。已<sup>ニ</sup>有<sup>二</sup>自<sup>笑</sup>意<sup>一</sup>、感慨在<sup>二</sup>言<sup>外</sup>。下半首自<sup>レ</sup>此生<sup>ス</sup>也。百花潭ハ浣花

溪一名。楚辭<sup>(注3)</sup>滄浪之水清兮可<sup>レ</sup>以濯<sup>レ</sup>我纓<sup>ヲ</sup>。滄浪ハ水ノ名、在<sup>レ</sup>楚<sup>ニ</sup>、漢水之下流。禹貢<sup>(注4)</sup>泗水東流<sup>シテ</sup>爲<sup>レ</sup>漢<sup>ト</sup>、又東<sup>シテ</sup>爲<sup>レ</sup>滄浪之水<sup>ト</sup>、是也。此言水之清者何<sup>レ</sup>必<sup>シ</sup>楚之滄浪。堂前ノ潭水即比<sup>レ</sup>之滄浪<sup>ニ</sup>、可<sup>レ</sup>以濯<sup>レ</sup>纓<sup>ヲ</sup>矣。蓋夏日之作、故<sup>ニ</sup>先言<sup>ニ</sup>其占<sup>ニ</sup>清涼<sup>ヲ</sup>。卜居<sup>(注6)</sup>詩亦稱<sup>ニ</sup>澄江銷<sup>ニ</sup>客愁<sup>ヲ</sup>、其澄清可<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>已。

(注2) 么麼は、微小、卑微の意。么は么に同じ。

(注3) 『楚辭』漁父篇。纓は冠の紐。

(注4) 『尚書』禹貢に「蟠冢より濞を導く、東流して漢と爲る。又た東して滄浪の水と爲る」と。孔伝に「泉は始めて山より出て濞水と爲る。東南流して河水と爲り、漢中に至り東行して漢水と爲る」という。

(注5) 『集千家註』(巻七)に「今、公、潭の清くして之を滄浪に比す可きを言ふなり」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

(注6) 前出025「卜居」詩。

地は「万里橋」に接しており、橋の名も壮大である。されどちつばけなへ一草堂で、やつとこさ我が身を容れて仮住まいしている。もうすでに「自ら笑ふ」意があり、感慨が言外に表れている。後半の四句はこれより生じたものである。「百花潭」は、浣花溪の一名。「楚辭」に「滄浪の水清まば、以て我が纓を濯ふ可し」と。「滄浪」は、川の名。楚にあり、漢水の支流。「禹貢」に「泗水東流して漢と爲り、又た東して滄浪の水と爲る」というのが、それである。ここを言う意味は、水の清らかなのは何も楚の「滄浪」にかぎったことではない。堂前の「潭水」をそのまま「滄浪」に比し、纓を濯うことができるとしている。けだし夏日の作であろう、さればまずその清涼を独占することを言う。「卜居」詩にも「澄江客愁を銷す」と称している。その澄みきったありさまがわかるうというものだ。

風含<sup>テ</sup>翠篠娟娟<sup>ニ</sup>淨<sup>ク</sup> 雨過<sup>テ</sup>紅葉冉冉<sup>ニ</sup>香<sup>ク</sup>

※娟娟：クツキリトシテ 冉冉：シメヤカニシテ

含<sup>ト</sup>者將<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>風<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>状。娟娟ハ妍好ノ貌。過<sup>ハ</sup>溼也。冉冉ハ弱貌。

因<sup>テ</sup>謂<sup>ニ</sup>香細<sup>ナル</sup>。上句竹林輕風滴<sup>リ</sup>翠<sup>ヲ</sup>、爽氣鮮新。下句蓮渚細雨澹<sup>シ</sup>花<sup>ヲ</sup>、清香幽深。皆寫<sup>ニ</sup>出<sup>ス</sup>活精神<sup>ヲ</sup>、涼景浮<sup>ニ</sup>動<sup>ス</sup>言表<sup>ニ</sup>。羅景綸<sup>(注9)</sup>云、上句風中有<sup>レ</sup>雨、下句雨中有<sup>レ</sup>風、謂<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>互體<sup>ト</sup>。黃維章<sup>(注10)</sup>云、字寫<sup>ニ</sup>風竹<sup>ノ</sup>逸致<sup>ヲ</sup>。若用<sup>ニ</sup>吹<sup>フ</sup>字<sup>ヲ</sup>便淺<sup>シ</sup>。過<sup>ハ</sup>字寫<sup>ニ</sup>雨蓮<sup>ノ</sup>幽韻<sup>ヲ</sup>、若用<sup>ニ</sup>灑<sup>ス</sup>字<sup>ヲ</sup>便俗。娟娟冉冉、尤見<sup>ニ</sup>狀<sup>レ</sup>物<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>妙<sup>ヲ</sup>。竟<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>兩幅美人<sup>ノ</sup>圖<sup>ト</sup>。過<sup>ハ</sup>一作<sup>ニ</sup>裏<sup>ト</sup>、訓包<sup>ト</sup>。猶言<sup>ニ</sup>凝<sup>ス</sup>耳<sup>ト</sup>。然<sup>モ</sup>竟<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>若<sup>ニ</sup>過<sup>ト</sup>字<sup>ニ</sup>也。

(注7) 「淨」字、錢注(巻十二)及び輯註(巻七)は「靜」に作り、輯註に「一に淨に作る」と注す。宇都宮遯庵の増広本に輯註を挙げる。

(注8) 例え、古今韻會舉要に「説文に濕なり」。

(注9) 羅景綸については、前出027「賓至る」詩の(注16)参照。その『鶴林玉露』巻七に見える。

(注10) 黃維章は、明・黃文煥(字は維章)のこと。天啓五年(一六二五)の進士。周采泉『杜集書録』に拠れば、『杜詩製碧』六巻がある。顧宸『註解』に「黃維章が曰く、是の詩を解する者謂へらく、風、翠篠を含んで其れ淨くして娟娟たり、雨の潤す所なり。雨、紅葉を過して其の香冉冉たり、風の送る所なり。風中雨有り、雨中風有り、と。此の解甚だ佳なり。吾れ謂へらく、杜が旨是の如からず。凡そ淨は雨從り説き、香は風從り説く。此れ常景常意のみ。必ず風從り淨を説き、雨從り香を説けば、乃ち常景を翻して新景と爲り、常意を翻して新意と爲る。此れ老杜物を観るに精しき處、雨の塵を洗ふ、淨からしむること風の塵を去るの捷なるに如かず。洗ふを待たずして淨し。含の字最も妙なり。恒に含むときは則ち恒に淨し矣。若し吹の字を用ふれば便ち稚なり。風中の花味、風の驅るに因つて遠く香し。雨中の花味、雨の積むに因つて倍ます深香有るに如かず。過の字最も妙なり。弥いよ過するときは則ち弥いよ香し矣。若し酒の字を用ふれば便ち俗なり。娟娟冉冉、尤も風雨中の篠葉の状を写出す。竹葉本と輕し。風之を含めば則ち益ます輕くして逸なり。故に其の逸致娟娟として妍を生ず。蓮包本と重し。雨之を過せば則ち益ます重くして垂る。故に其の体勢冉冉として婉弱なり。物を状するの妙、竟に兩幅の美人の図の如し」と。宇都宮遯庵の両著にも、これを引く。

(注11) 「過」字、諸本は「裏」に作り、例えは薛益「分類」の慶安四年刊本に

は「ツ、ンテ」と訓じている。

〈含〉とは、まさに風が生じようとする状態。〈娟娟〉は、みめうるわしきさま。〈漚〉は、湿である。〈冉冉〉は、かよわきさま。そこから、香のかそげきこと。上の句は、竹林にそよぐ軽やかな〈風〉が〈翠〉を滴らせ、爽やかな気が新鮮である。下の句は、渚の蓮にふる細やかな〈雨〉が花をうるおして、清らかな〈香〉がほんのりと漂う。いずれも生き生きとした姿を写し出し、涼しげな景色が言表に浮かび出ている。羅景綸が云う、「上の句は風のなかに雨が下、下の句は雨のなかに風がある。これを互体という」、黄維章が云う、「〈含〉の字は、風にそよぐ竹の逸致を写し出している。もし吹の字を用いたとしたら浅くなる。〈漚〉の字は、雨に濡れる蓮の幽趣を写している。もし漚の字を用いたとしたら俗になってしまう。〈娟娟〉〈冉冉〉の語に、とりわけ形容の妙があらわれており、両幅の美人画のようだ」と。〈漚〉は、一に〈裏〉に作り、つつむと訓ずるが、凝とほぼ同義。されど結局は〈漚〉字には及ばない。

厚祿故人書断絶 恆饑稚子色淒涼

※断絶：ミカギラレ 淒涼：アラザメタリ

前聯ハ直ニ跟シテ第二句ニ言「清涼之境」此ハ則承ニ起句ヲ、轉シテ入ニ感慨ニ。世情輕薄、富貴、舊友、書且断絶、誰肯周急。（注11）客居貧窮、粗糲充饑。（注12）子女枵腹、菜色淒涼、則澄江即滄浪、不復足銷スルニ客愁ヲ。風竹雨荷、亦何ニ爲シ哉。

（注12）『論語』雍也篇に「君子は急に周して富めるに繼がず」とあり、朱子の注に「急は窮迫なり。周は足らざるを補ふ。繼ぐは餘有るに続く」と。

（注13）前出027「賓至る」詩に「百年粗糲腐儒の餐」とあり、「クコゴメメシ」と左訓を施す。

（注14）邵宝『集註』（卷二十一、宮室類）に「色淒涼とは、卑幼菜色有るを言ふ」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。菜色の語、『礼記』王制篇に「凶旱水溢有りと雖も、民に菜色無し」とあり、鄭玄の注に「菜色は、菜を食ふの色」という。また『漢書』翼奉伝に「連年飢饉、之に加ふるに疾疫を

以てし、百姓菜色、或いは相食むに至る」と見え、顔師古の注に「人専ら菜を食ふ。故に肌膚青黄、菜色を為すなり」と。ちなみに東陽の『薈瑣録』巻上に「饑顔ヲ菜色ト称スルハ、嘉穀ノ飯ニ乏シクシテ、専ラ野菜植物ノミ食スレバ顔瘦セテ光沢ヲ失フ、ヒモジキ顔色ト云フコトナリ」云々という。

（注15）前出025「居をトす」詩に「更に澄江の客愁を銷する有り」と。

前の一聯は、ただちに第二句につづいて、清涼の境を言う。ここは起句を承けて、一転して感慨に入っている。世間の人情は軽薄で、富貴となった旧友からは、〈書〉すら〈断絶〉し、誰が困窮を救ってくれようか。旅住まいの貧乏暮らし、粗糲で飢えを充たしている。幼い息子やむすめたちは腹をすかせ、精気なくひもじい顔色をしている。されば眼前の澄んだ江がそのまま〈滄浪〉だとしても、客愁を消すには充分ではない。風にそよぐ竹や雨に濡れる蓮の花が、いったい何の役に立つというのか。

欲填溝壑ニ惟疎放 自笑ヲ狂夫老叟ニ狂

※疎放：ヤリバナシ 自笑：ウレナガラモオカシ

欲ハ猶將也。言ニ勢欲スルヲ及ニ也。填ニ溝壑ニ見ニ史記范雎傳ニ言下身死シテ葬スル者、如ニ犬馬之斃カ、棄中尸ヲ於溝壑上。疎放、不ニ拘檢一也。向秀思舊賦「嵇康ハ志遠シテ放、呂安ハ心曠ニ而放。公詩毎ニ用ニ疎放」蓋本ニ于此ニ。惟字極無レ可ニ奈何ニ之意。蓋公生理艱窘、殆填ニ于溝壑ニ、無聊極リマズ矣。實ニ疎放之所致ス、然レ不レ可ニ奈何ス。亦惟疎放自遣而已。安能復區區ニ局促セン。吾本狂夫疎放、今老ヲ衰レ、乃更ニ益ク狂ス。不ニ惟人笑ニ、良ニ亦自笑レ之矣。嗚呼、公ニ而落魄、一ニ至于此ニ哉。

（注16）基づく所があるのか、不明。

（注17）『史記』卷七十九、范雎伝に「范雎既に相たり。王稽、范雎に謂ひ曰く、（中略）使臣卒然として溝壑に填む。是れ事の知る可からざることの三なり」と。ちなみに、溝壑の語、『孟子』滕文公下に「志士は溝壑に在るを忘れず」と見え、『薈瑣録』巻下に「転ニ於溝壑ニトハ行斃レ者トナ

り果テルコトナリ、但シ自ラ転陥シテ死スルニハ非ズ、其屍ヲ葬リ取ムル者ナク、犬猫ノ死シタル如クニシテ溝壑ヘ転ジ棄テラルルヲ謂フナリ云々という。

(注18) 錢注に「向秀思旧の賦に、稽は志遠くして疎、呂は心曠にして放」と。警者唐仲曰く、杜詩毎に疎放を云ふ、蓋し此れに本づく」と。西晋・向秀(字は子期、二二七?~二七二)の「思旧の賦」は、『文選』卷十六。唐仲は、明・唐汝詢(字は仲言、一五六四~一六六〇)のこと。五歳にして失明した。著に『唐詩解』五十巻がある。澤田瑞穂「盲詩人唐汝詢生卒考」(『中国詩文論叢』第一集、一九八二年。後に『閑花零拾―中国詩詞隨筆』研文出版、一九八六年に収録)参照。

ちなみに、杜甫が「疎放」の語を用いるのは、  
・「尊榮地絶を瞻、疎放窮途を憶ふ」  
・「河南の韋尹丈人に寄せ奉る」詩、詳註卷一)

・「客礼疎放を容れ、官曹接聯す可し」  
・「嚴八閤老に贈り奉る」詩、詳註卷五)

・「酒を嗜みて益ます疎放、琴を弾じて天壤を視る」  
・「八哀詩」其六、故著作郎貶台州司戸繁陽鄭公度、詳註卷十六)

・「中原未だ兵を解かず、吾終に疎放を得」  
・「晚州に次す」詩、詳註卷二十二)

の四例である。このうち、「八哀詩」の場合は、鄭虔について言う。

(注19) 『集千家注』に第七句に注して「極めて奈何す可きこと無しの意」と。字都宮遼庵の増広本に挙げる。

(注20) 邵傳『集解』に「老いて更に狂すること此の如し、惟だ人笑ふのみならず、吾れも亦た自ら笑ふなり」と。

〈欲〉は、將とほぼ同義。勢いが及ぼうとするのをいうのである。〈溝壑に填む〉は、『史記』范雎伝に見える。死んでも葬ってくれる人がなく、犬や馬同然に屍をへ溝壑に棄てることを言うのである。〈疎放〉は、拘束されぬこと。向秀「思旧の賦」に「嵇康は志遠くして疎、呂安は心曠にして放」と。公の詩に〈疎放〉の語を用いるときは、けだしこれに基づいているのであろう。〈惟〉字は、まったくどうしようもないという意。けだし公は生計に苦しみ難儀し、へ溝

壑にへ填む寸前で、どうにもこうにもやるせなさか極まっている。これは実に〈疎放〉なる性格が招いた結果なのだが、さりとしてどうにもならないのだ。やはり〈疎放〉のまま憂さ晴らしをするしかないのである。どうしてちまちまとちぢこまっておられようか。自分はもともと〈狂夫〉で〈疎放〉の質、今は年老いて慎むべきなのに、かえって〈更〉にますます〈狂〉してきた。他人様が物笑いにするばかりか、まことに〈自〉らそのことが〈笑〉えてくる。ああ、公ほどの方でも落魄して、こんなふうになでられるのか。

030 江村

同前(前に同じ)

清江一曲抱村流

長夏江村事事幽

※幽：シツカ

緑水抱村<sup>テ</sup>而曲<sup>ル</sup>。公、廬在<sup>ニ</sup>其處<sup>ニ</sup>、占<sup>ニ</sup>佳境幽趣<sup>ヲ</sup>。而長夏悠悠、事事幽閑、聊亦足<sup>ニ</sup>以自娛<sup>ニ</sup>也。

みどりの水が〈村〉を〈抱〉いて湾曲している。公の草堂はそこにあり、景勝の地の静かなたたずまいをひとり占めしている。〈長夏〉の一日はのどかで、〈事事〉ひっそりかんとしており、まずは自ら娛しむのに充分である。

自去自来<sup>ル</sup>堂上<sup>ノ</sup>燕 相親<sup>ニ</sup>相近<sup>ツ</sup>水中<sup>ノ</sup>鷗

※自去自来：インダリキタリ 相親相近：ナレクシクヨリクル  
燕<sup>不</sup>嫌<sup>ニ</sup>貧家<sup>ヲ</sup>、鷗<sup>忘</sup>機<sup>ヲ</sup>相馴<sup>ル</sup>、正<sup>ニ</sup>是事事幽<sup>ナリ</sup>。蓋亦賓朋斷絶、  
閑暇悠悠、惟鷗燕日<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>作<sup>レ</sup>縁耳。曰自去自来、曰相親相近、不<sup>レ</sup>  
似<sup>ニ</sup>世情<sup>ノ</sup>炎涼<sup>ニ</sup>、隱<sup>ニ</sup>然<sup>リ</sup>言表<sup>ニ</sup>矣。

(注1) 〈堂〉字、輯註(卷七)は〈梁〉に作る。薛益『分類』(巻一)、顧宸『注解』も同じ。

(注2) 前出026「堂成る」詩に「頻りに来る語燕新巢を定む」と。

(注3) 鷗は機心のない人にもみ馴れるという。訳注稿(二)、001「張氏の隠居に題

す」詩の（注25）（注26）参照。

（注4）顧宸『註解』に「黄漢臣が曰く、「自去自来」の二句を味はふに、隠然として賓朋断絶、車馬寂寥の感有り」云々と。宇都宮遷庵の増広本にも拳げる。

〈燕〉は、貧家を厭わず巢をつくり、〈鷗〉は、機心を忘れ馴れている。まさしく〈事幽〉なることである。けだしやはり賓客朋友とはさっぱり行き来が途絶えているが、暇な時をのんびりとすごし、ただ〈鷗〉や〈燕〉と日々縁をなすばかりだ。〈自ら去り自ら来る〉といい、〈相親しみ相近づく〉というのは、貧賤をうとんじ勢利になびく世間の人情とはまるっきり異なっていることが、隠然として言外にあらわれている。

老妻畫紙<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>棋<sup>ヲ</sup> 稚子敲<sup>テ</sup>針<sup>ヲ</sup>作<sup>ル</sup>釣<sup>鈎</sup>

亦言<sup>ニ</sup>事<sup>ヲ</sup>幽<sup>ナルヲ</sup> 是村家之態。然<sup>トモ</sup>貧陋寒酸、多少<sup>ノ</sup>感愴。往日儼然<sup>ク</sup>拾遺公<sup>ノ</sup>夫人郎君、今<sup>ハ</sup>則眞<sup>ニ</sup>是村婦野兒。公愍然傍觀、情何<sup>ヲ</sup>以堪<sup>シ</sup>。抑<sup>シ</sup>亦隨<sup>レ</sup>分<sup>ニ</sup>爲<sup>レ</sup>娛<sup>ヲ</sup>、安<sup>シテ</sup>其所<sup>ニ</sup>遇<sup>フ</sup>、聊自慰<sup>ス</sup>已<sup>ム</sup>。公、夫人楊氏、司農少卿怡<sup>ノ</sup>女也。子二人、宗文宗武。爲<sup>ニ</sup>一作<sup>レ</sup>成<sup>ニ</sup>。

（注5）元稹の「唐檢校杜工部員外郎墓係銘並びに序」に「夫人は、弘農楊氏の女、父を司農少卿怡と曰ふ。四十九年にして終はる」と。司農少卿は、穀物倉庫の管理を掌る司農寺の次官で、品階は從四品上。

なお、陳貽愾『杜甫評伝』下巻の第二十章第九節には、開元二十九年（七四一）杜甫が三十歳、楊氏が十九歳前後の時に結婚したと推定し、楊氏は杜甫より後に卒したとする。その結婚を開元二十九年に繫年するのは、四川省文史研究館編『杜甫年譜』、馮至『杜甫伝』（人民文学出版社、一九五二年）、郭沫若『李白と杜甫』（人民文学出版社、一九七一年）の『李白杜甫年表』や莫励鋒『杜甫評伝』（『中国思想家評伝叢書』、南京大学出版社、一九九三年）に附された『杜甫簡譜』なども同じで、これが通説となっている。それに対して、王輝斌『杜甫妻室問題索隱』（『大慶師專學報』一九九一年第一期。後に『唐代詩人婚姻研究』収録、群言出版社、二〇〇四年）では、楊氏は開元五年（七一七）頃に生まれ、開元二十二年（七三四）杜甫が二十三歳、楊氏が十九歳の時に結婚したとするほか、楊氏は大暦元年

（七六〇）頃に卒し、大暦二年に杜甫は夔州の卓氏と再婚したという新説を提示している。

（注6）訳注稿（一）「詩聖杜文貞公伝」の（注36）に挙げた陳文華『杜甫傳記唐宋資料考辨』第一篇〈家族資料之考訂〉には、宗文は天宝九載（七五〇）、宗文は天宝十二載（七五三）生まれと推定されており、それに従えば、この詩が作られた上元元年（七六〇）当時の子供たちの年齢は十一歳と九歳となる。

（注7）錢注（卷十一）および輯註に「一に成に作る」と注する。輯註は、宇都宮遷庵の増広本に挙げる。

やはり〈事幽〉なるを言う。これは村家の様子。されど貧乏でわびしく、少なからず感慨や悲哀がある。そのかみは押しも押されぬ拾遺殿のお内儀と若様が、今ではすっかり田舎婆さんと山家育ち。公は隣りで傍からみているのだが、その心持ちどうやって堪えられよう。そもそもやはり分にしたがつて娛しみを見いだし、境遇に甘んじて、なんとか自らを慰めるばかりだ。公の夫人楊氏は、司農少卿怡の女である。子は二人、宗武と宗文。〈爲〉字、一に〈成〉に作る。

多病所<sup>ハ</sup>須<sup>ル</sup>惟藥物 微軀此外復何<sup>ヲ</sup>求<sup>メン</sup>

※所須<sup>ニ</sup>ナクテナラヌハ 何求<sup>ニ</sup>ナニモイラヌ

須待也、用也。猶云<sup>レ</sup>仰<sup>レ</sup>給<sup>ヲ</sup>也。公既<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>隱士<sup>ト</sup>、無<sup>ニ</sup>復求<sup>ニ</sup>於世<sup>ニ</sup>。但以<sup>ニ</sup>身多病<sup>ナルヲ</sup>、憑<sup>ニ</sup>仗藥物<sup>ニ</sup>、故<sup>ニ</sup>獨此一種未<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>求<sup>ト</sup>耳。言<sup>ニ</sup>遺世<sup>ヲ</sup>無欲澹然自安<sup>スルヲ</sup>也。文苑英華<sup>（注9）</sup>第七句作<sup>四</sup>但有<sup>ニ</sup>故人<sup>ノ</sup>供<sup>ニ</sup>祿米<sup>ヲ</sup>。蓋言<sup>ニ</sup>嚴武之惠<sup>ヲ</sup>。或<sup>ハ</sup>初稟乃然<sup>リ</sup>歟。

（注8）例えば、『字彙』の須字の条に「又た待なり、資なり、用なり」と。

（注9）輯註に「英華、但だ故人の祿米を供する有りに作る」と。宇都宮遷庵の増広本もこれを挙げる。『文苑英華』は、北宋の李昉・宋白らの奉勅撰による六朝梁から晚唐五代までの詩文の総集。全千巻。その巻三一九に見え、「集は多病須ふる所は唯だ藥物に作る」と注する。

〈須〉は、待である。用である。給を仰ぐというのとほぼ同じ。公

はすっかり隠士となつてしまつており、もう世に「求」めるものはない。ただ〈多病〉の身であるので、〈薬物〉にやつかいになつており、されば、こいつだけは「求」めないわけにはいかぬのだ。世間のことなど忘れては、まったく無欲で自ら安んじていることを言うのである。『文苑英華』では、第七句を「但だ故人の禄米を供する有り」に作る。けだし敵武からの恵みを言うのであろう。ひよつとすると初稿ではそうなつていたのであろうか。

前稿補訂  
\* \* \*

『杜律詳解』 訳注稿(一)「文化と情報」第三号

22頁上段7行目 (注28)に追加。なお、『宛委餘編』のこの一節は、伊勢・渡会

末茂(号は鶴溪。一七三三年歿。享年五十九。一説に六十二)

撰『杜律評叢』巻二、「堂成」の詩の条にも挙げる。ちなみに、

北可昌(北村篤所)及び伊藤長胤(東涯)の序を冠し正徳四年

(一七一四)に刊行されたこの書は、吉川幸次郎編『杜詩又叢』

(中文出版社、一九七六年刊)にその影印が収められている。

『杜律詳解』 訳注稿(三)「文化情報学部紀要」第二巻

140頁上段4行 (注18)に追加。また『丹鉛總録』は、度会末茂の『杜律評叢』

(巻一)にも挙げる。

149頁下段23行 (注30)に追加。なお、『水川詩式』は、度会末茂『杜律評叢』

(巻一)にも挙げる。

153頁上段16行 『事物起原』→『事物紀原』

156頁上段15行 (注20)に追加。なお、『後山詩話』は、度会末茂『杜律評叢』

(巻一)にも挙げる。

156頁上段24行 (注21)に追加。なお、『風月堂詩話』は、度会末茂『杜律評叢』

(巻一)にも挙げる。

『杜律詳解』 訳注稿(四)「文化情報学部紀要」第三巻

149頁上段16行 今自り宜しく→今自り宜しく

164頁下段2行 見えるのは↓「見」えるのは

164頁下段7行 見えるのは↓「見」えるのは、ただ

164頁下段8行 姿だけである。の次に、それも「落日」のときになつてやつと

「見」えるのだ。という一文を補う。

166頁上段6行 まねするようなものである。↓まねするようなものである。

168頁下段17行 情ひて↓情うて

この他、訳注稿(二)「文化情報学部紀要」第一巻)37頁下段16行の(注8)で、劉士龍について他の杜詩注に見えないとしたが、清・胡以梅『唐詩貫珠』(巻五、秋)の「秋興」八首其八の箋釈に「予、明・富平(今の陝西省富平県)の劉士龍が漢陂に遊ぶ記を読むに、此の陂は元の時已に陂を決して田と為し、稲を種う、と。一時の小利を貪りて、千古の名勝を壊す。殺風景甚だし矣。是の詩を読む者をして、又た知らず如何に感ずるや焉」と見える。

また訳注稿(三)140頁下段16行目の008「奉和賈至舍人早朝大明宮」詩において「奉和」を「和し奉る」と訓じないことに関連して、『夜航餘話』巻上に「奉ノ字ハ恭敬ノ義ナリ。奉獻奉寿ト読ヘシ。廻環シテ読ハ非ナリ」とある。

さらに訳注稿(四)147頁下段22行目の「夾城」について、098「秋興八首」其六の詳解に「夾城は復道なり。天子其の中を往来して外人見ること莫し」云々と見えること、168頁下段2行目の「二句雖一氣」から4行目「不得隨口念過」まで、これは明の鍾惺・譚元春撰評『唐詩歸』(巻二十二)に「鍾云ふ、二句一氣と雖も、然れども上語は悲、下語は謔。微吟して自ら知る。口に随つて念じ過すことを得ず」というのに拠ること、それから172頁上段4行目の(注39)に挙げた朱放の「竹林寺に題す」詩に関連して、『夜航餘話』巻上に「殷勤ハ、ネンゴロニト訳ス。委曲ニ心ヲ尽スノ謂ナリ」とし、「殷勤ニ竹林寺、能得ニ幾度カ過トテハ、ナゴリ惜ク懇ニ恋スルナリ」と説いていることも、あわせて補足しておく。

(二〇〇四・一〇・一七初稿)  
(二〇〇四・一一・一三補筆)

このみや・としひろ／文化情報学部教授  
E-mail: minomiya@sugiyama-u.ac.jp